

# 透明な物をなくさない方法

ヤンデレ大好き星人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

作田吉利（さくた よしとし）。彼は『普通の人生を送る』を目標に掲げる高校生である。そのために平凡な学園生活を志しており、特別目立つことを嫌っていた。

そんな彼の日常に、小さな亀裂が走る。その原因は、西崎春子（にしぎき はるこ）という女子生徒だった。彼女は学校一の人気者で、なにをするにも噂の中心である。男子からの人気もさることながら、その容姿は他の追随を許さない。そんな彼女が、吉利に恋をした。

これは普通の生活を守りたい男子高校生が、学校で最も注目される女子生徒から全力で距離を取る物語である。

※ヤンデレっぽい感じのキャラが出ますが、殺人などのないぬるい内容です。

目次

第一話	俺に構うな	1
第二話	お前とは付き合わない	11
第三話	面白いやつだ	23
第四話	ファンなんだ	34
第五話	わかった、付き合おう	46
第六話	別れよう	58
第七話	恋人のふりか悪くない	69
第八話	さようならだ春子	79
第九話	油断した	89
最終回	知ってたのか	100

## 第一話 俺に構うな

俺は作田吉利（さくた よしとし）。どこにでも居そうな普通の高校生だ。そんな俺には大きな夢がある。それは何者にもならず、人生を終えることだ。普通の大学に通い、サラリーマンとして働く。そうして最後は、老人ホームで息を引き取る。そんな誰の記憶にも残らないような人生を歩みたいのだ。

一人の人物を紹介しようと思う。西崎春子（にしぎき はるこ）と言う女子生徒だ。彼女は他の生徒から笑（えみ）ちゃんと呼ばれている。そのような、本名と一切関係がない愛称で呼ばれているのには理由がある。

彼女は、誰と話している時でも明るく微笑む。普通の人間が『ここにこ』と笑うとすると、彼女は『ここにここにこ』と言うふうに『ここ』が2個ほど多いのだ。そんなだから笑ちゃんなんて呼ばれるようになった。男子からは絶大な人気があり、かと言って女子からの妬みもない。誰からも好かれている、言わば学園のアイドルと言うやつだ。そして目立つのが嫌いな俺からすると、最も関わりたくないタイプの人間でもあった。

ではなぜ彼女の名前を出したかという、それは俺が高校に入学したばかりの頃……。



俺は作田吉利。普通を愛する男である。住んでいる場所は都会とはとても呼べないが、暮らしに困るほど田舎でもない。駅前なんて、むしろ緑を見つuckerの方が難しいくらいだ。そんな俺の平凡な日常は、高校に入ってから変化がなく1月が経っていた。吉利なんて呼びにくい名前から最後の文字が剥ぎ取られ、よしとと言う中学時代からの愛称が定着するくらいには学校に馴染み始めていた。

着々と普通の高校生活を構築しつつある俺でも、ある問題を抱えていた。金がないのである。実は今、一人暮らしをしている。受験に合格した次の日、父の転勤が決まった。転校は色々と面倒だったので、家族で話し合った結果、俺だけこの街に残ることとなった。

一人暮らしを始めてみると、結構なお金が掛かった。育ち盛りの男子は、食費だけでも相当な出費だ。

そういう訳だから、俺は近所のコンビニからアルバイト求人誌を片っ端からむしり取った。集めた求人誌は結構な量で、自宅に帰ってしまうと面倒になってもう読まない。集中できる喫茶店でもないかと、あてもなく歩く。すると細い路地に看板が見えた。

喫茶店・六連星。そう書かれた木の看板が下がっている。読み方が分からず、下のローマ字に目をこらすと『SUBARU』と書いてあった。六連星は『すばる』と読むらしい。

すっかりした木造のドアに、それを飾る手入れの行き届いた植物。小さな喫茶店だが、民家を改造しただけのなんちゃって喫茶ではないようだ。

少し高そうな店構えだったが、好奇心からついつい入店してしまう。こういう部分が、金欠を引き起こしているのかもしれない。

ドアを開け、がらんがらんという馴染みのあるベルの音をさせながら店内に入ると、バーテン風の男に席を案内された。

いちいち店員を呼ぶのも面倒なので、そのままコーヒーを注文する。店員はそれを承り、後ろでコーヒーを入れ始めた。男の年齢は40半ばといったところで、白いシャツに黒いベストを着ている。髪型はオールバックで口元には髭があった。見渡すと他に店員はおらず、彼一人で店を回しているようだ。

本来の目的である求人誌を開く。居酒屋のホールや、レジなんてのが多くあるが俺には接客なんて無理だ。清掃や警備は、どうにもハードそうだし時間も合わない。妥協点を設定しなかったせいで、これといったものを見つけられない。集中力が切れたことでついつい、前髪をいじるといふ癖に逃避してしまう。俺は目立つのが嫌いだ。そのせいで2つの身体的なコンプレックスを持っている。一つは、183センチと微妙に身長が高い。体が大きいとそれだけで何かと目立つ。そしてもう一つは、生まれつき巻いているこの髪だ。子供の頃になんとかまつすぐにならないかと引つ張っていたら、髪をいじるといふきざったらしい癖がついてしまった。

求人誌をただ眺めていると、店員がコーヒーを持ってきた。

「こちら今日のブレンドでございます。ミルクや砂糖もあります  
が、まずはそのままでお楽しみください」

目の前に置かれたブラックコーヒー。困った。俺はブラックが苦手だ。適当に入ったが、変にこだわりのある店だったらしい。客が少ないせいで、見張られているような感覚に駆られ、そのままカップに口をつけた。驚いた。苦手なはずのブラックコーヒーが飲めるのだ。いや、おいしいとはつきり言える。味覚という五感が好印象を得たことで、他の感性も影響を受ける。よく見れば店の雰囲気はシックで落ち着きがある。店内に流れる音量の小さいクラシックも、空間にマッチしていた。

見れば見るほど求人などの働き先よりも、魅力的に感じた。コーヒーをもう一杯頼むついでに、駄目元でアルバイトを募集していないかと尋ねてみた。

「いいですよ」

そう返事がきた。一瞬なにが『いいですよ』なのか分からなかったが、店員の目線の先に、俺が見ていた求人誌があった。つまり、ここで働いてもいいですよという意味らしい。

客がほとんど居なかったので、まさか採用されるだなんて思っていなかった。詳細を聞くと、時給800円と言った。安い。最低賃金を下回っている。だがそれは良い。生活費に足りない分を補いたいだけだ。それよりも重要なことがある。俺はうるさい場所が嫌いで、忙しく動くのも苦手だ。そうするともう働ける場所など限られる。多少の低賃金は許容出来ようというものだ。

そんなこんなで、晴れてバイト先を見つけた。一見なんの問題もない六連星という喫茶店。しかし、ここにはとんでもない罠があった。

バイトを始めて一週間。学校の制服が黒いスボンと白いシャツなので、その上にエプロンを着けるだけでいい。そのため、放課後に学校から直接通えた。仕事内容は慣れるもなにも客が少なく、誰もいない時間は読書すら許された。なんとという緩さだろうか。俺を雇って

くれた人を、今はマスターと呼んでいる。マスターはとても寡黙だが良い人だ。

それにしても今日は客が居ない。アルバイトは本当に必要だったのだろうか。そう考えた瞬間、俺の思考を読んだかのようにドアが開いた。しかし客が開くドアではなく、普段開くことのない、店の奥にあるドアだった。

「お父さーん！ 食器洗剤って買い置きあつたっけ」

入って来た少女は、会話内容からマスターの娘だと推測できた。そして俺が通っている学校の制服を着ている。その少女は俺の存在に気づき、一瞬固まった。それはそうだろう。こんな客の少ない店が、まさかアルバイトを雇っているとは思わないはずだ。

少女は軽く会釈をすると、奥に引つ込んだ。家族のちよつとした会話を聞かれたのが恥ずかしかったようだ。

会釈をした時に少女の顔が見えた。ふわりとした色素の薄いセミロング。とんでもなく整った顔立ち。見知った顔。当たり前だ。俺の学校で彼女を知らない人など居ない。彼女の名前は西崎春子。いつも笑顔で人当たりが良く、笑ちゃんの愛称で誰からも愛される有名な人だ。学園のアイドルだなんて存在は、ドラマや漫画の世界だけの話だと思っていたが現実には小説より奇なりとはよく言ったものだ。

この時、嫌な予感がしていた。誰にも見つからない、人の来ない喫茶店という最高のアルバイト先。そこは学校で最も有名な女子生徒、その父親が経営している喫茶店だった。俺は高校に入り、始めて目の当たりにしたものがある。それは男の嫉妬だ。この西崎春子と言う人物を中心に、周りを風速20メートルの嫉妬が吹き荒れている。そんな中に自分から突っ込むほど、馬鹿じゃない。だが災害というものは、こちらが望まずとも接近してくるものだ。

次の日、いつものように喫茶店で働いていると、昨日と同じ時間に同じドアが開いた。まるで鳩時計から飛び出して、時間を知らせる鳩みたいだ。ドアから出て着たのは、これまた昨日同様、西崎春子だった。彼女は人のいない時間を把握しているらしい。マスターに何か

用事があるのだろうかと思っていると、彼女は真っ直ぐ俺の所にやってきた。

「えっと、作田吉利くん……だよな？」

なぜ名前を知っている。俺は彼女と違い有名人ではない。それどころか気配を消して過ごしている。

「昨日会った時に、学校で見たことあるなーって思って、友達に聞いたんだ。そしたら名前知ってたから」

そう言っつてふわりとはにかむ。なるほど、これが笑ちゃんと呼ばれる由縁か。なんとという完璧な笑顔だ。と言うより今なんて言った？

友人に俺の名前を尋ねただと。やめてくれ、君のような有名人に名前を出して欲しくないんだ。

「昨日はごめんね。ここがバイト雇うなんて思ってなかったから、ちよつとびつくりしちゃって」

無言で立ち去ったことを、気にしているようだ。俺はそんなことは気にも止めていない。まだ何か用事があるのか、彼女は俺の様子を伺っている。つてか近い。人間にはパーソナルスペースというものがあり、それよりも接近されると緊張する。パーソナルスペースは男の方が広い。そのため女性にとってちょうど良い距離まで接近されると、男は緊張を恋と勘違いしてしまうらしい。こうして西崎春子と直に接してみると、そのパーソナルスペースが普通の女性よりも狭いのだと分かった。これはモテる訳だ。大抵の男はこの笑顔と距離でころつと持っていかれるだろう。だが俺は違う。平和な生活を送るために、君のような危険因子とは関わりたくない。

「私のことは知ってる？ 西崎春子って言うんだけど、学校では笑ちゃんって呼ばれてるから作田くんもそう呼んでいいよ」

嫌に決まっているだろう。そんなフレンドリーな呼び方はできない。せいぜい西崎さんが限界だ。

「えー、遠慮しなくていいのに」

いきなりあだ名を押し付けるだなんて、彼女の会話力はどうなっているのだろうか。完全にカンストしているんじゃないだろうか。

「それより、お父さんはどうしてアルバイトなんて雇ったんだろう。」



作田くん知ってる？」

知らない。相槌を打っているだけだが、西崎さんはぐいぐいと会話を進める。会話を長続きさせないために編み出した、他人と極力目を合わせないテクニクがまるで通用しない。ちなみに人間は人の目に強い印象を持つそうだ。俺は相手に印象を残させないよう、前髪を目にかかるといまで伸ばしている。右目なんてほとんど隠れてしまっている。そんな俺の目をじっと見つめて、西崎さんは話しかけてくるのだ。

「ねえ、作田くんはどうしてここで働くことにしたの？」

人と関わりたくない。静かな場所が好きだ。そんなネガティブな理由ばかりだが、面接でもないし嘘をついてもしょうがないので正直に伝えた。初対面でネガティブを展開すると大抵の女性は引くものだ。

「そうなんだ。なんか分かる気がするなー」

絶対嘘だろ。

「私もアルバイトとか、それが億劫でやらないところあるし」

確かに西崎さんだと、ある意味で人間関係が面倒臭そうだ。だが俺とは違う。

「意外と気が合うね」

そう言っつてはまた微笑む。なんだろうか。話してみると、ますます彼女が人気な理由が見えてくる。普通に良い人な西崎さんをあまり邪険にすることが出来ず、だからだと会話を続けてしまった。しばらくして、がらんと扉が開く音がすると

「お客さん来ちゃったね。じゃあまたね」

と言って店の奥のドアに戻って行った。一体なんだっただろうか。しかしまあ、彼女は友人が多いので暇ではないはずだ。ただ挨拶に来ただけだろうと思ひ、彼女のことは頭の片隅にすら残さず仕事に戻った。

それから毎日、客の居ない時間になると西崎さんは店に降りて来た。そして何が気に入ったのか、俺と会話しては客が来ると去って行

くのだ。そして俺の心は完全に陥落していた。陥落したというのは、恋に落ちたとかではない。会話をすることでお互いの理解が深まり、友情が芽生えていた。人気者は伊達ではない。

「やあ、よしと君」

今日もまた笑顔で現れる西崎さん。なんて可愛らしい笑顔なんだろうか。ちなみに呼び方は、いつの間にか変わっていた。

「ねえねえよしと君、ちょっと聞きたいんだけど」

そう言っただけで軽いステップで距離を詰めて来る西崎さん。やはり近い。この感じで学校で話しかけられたら、男子生徒たちに殺害されかねない。前に学校では話し掛けないように言ったら、なんとも悲しそうな顔をされた。俺だって友人にこんなことを言いたくはないが仕方ない。

「私もお店手伝うって言ったらどう思う？」

良いんじゃないだろうか。実はこのお店、結構忙しくなっていた。俺がアルバイトとして雇われたのは単なる気まぐれではなく、近所のケーキ屋と提携したことが理由だった。元々質の高かったコーヒーに加え、しっかりとしたケーキを出すことで客が増えるとふんだんだ。結果としてそれは成功し、アルバイトを始めた当初に比べ、倍以上も客が来ていた。

「じゃあお父さんに言ってみるね」

俺に許可を取っても仕方がないだろう。西崎さんは後ろでマスターと話した後、奥に引込んだ。しばらくすると、俺のエプロンと同じものを身につけ戻って来た。同じエプロンなはずなのに、彼女が着ると軽さがあると言うか、堅苦しさを感ぜなかった。

「どうかな？」

エプロンとその下に隠れたスカートを揺らしながら、何かを期待するように上目遣いでこちらを窺っている。なかなか似合っている。逆にそれ以外どう答えればいいのか。

「やったー！」

そしてこの笑顔だ。小さくガッツポーズをして体をそわそわとさせている。喜びを全身で表現するあたり、子犬みたいだ。しかし、ど

うして急に店を手伝おうと思ったのだろうか。

「うーん……ないしょ」

だそうだ。彼女の行動原理は分からないが、嬉しそうだから放っておこう。

こうして西崎さんは喫茶店・六連星のお手伝いをするこことになり、彼女と過ごす時間が前より長くなった。

何もない普通の学生生活を送っていると、濃密な時間というものがない。そうなると時間が経つのが早く、足早に夏休みが降臨した。夏休みになると、アルバイトの時間が長くなる。そこには当然西崎さんも居る訳で、最近彼女と居る時間が最も長い気がしてきた。空き時間など暇な時は、つつい彼女と話してしまふ。そうして俺は、西崎さんとますます仲良くなっていた。

その日、バイトが終わり帰ろうとすると引き止められた。西崎さんはいつも俺が帰ろうとすると、なにか冷たい飲み物を用意してくれる。蝉の鳴き止まないこの時期に、これほど魅力的なものはない。バイト終わりの乾き果てた俺の体はこれを断れず、カウンター席に座った。エプロン姿の西崎さんが、ドリンクを用意しているのを眺める。うん、やはり彼女の外見は優れている。彼女が働き初めてから、男性客が増えたほどだ。

「ん？ なに？ 私のことずつと見てるけど」

しまった。つい西崎さんを眺めたまま考え事をしてしまった。嫌悪感を抱かせてしまっただろうか。そう思い彼女を見ると、いつものようににこにここと微笑みながら俺の前にアイスカフェオレを置いた。気にしていないようだ。

西崎さんは自分の分のドリンクを用意し、椅子を俺に少し寄せた。そして女性が使うには高さのある椅子に、身軽な動作で座った。いつも思うが、椅子を寄せすぎだ。

「そうかな。私は気にしないけど」

いや気にしてくれ。距離を詰められると視線を外すのに苦労する。前髪で半分隠れている目で一瞬彼女を見ると、ばっちり目が合っ

た。

「それにしてもお客さん増えたね」

確かに。ケーキ屋との提携は予想を超える反響だった。元々は美味しいと評判だったケーキ屋だが、町の人口が減ったせいで常に新しいケーキを提供出来なくなっていた。古いケーキは味が悪いが、売れ残りを全て捨てていたら利益が出ない。そこで喫茶店・六連星がケーキを買い取ることで品質が保持できた。お互いに良い結果が得られた訳だ。だが接客を避けるために、客の少ないバイト先を選んだ俺にとっては複雑な気分だ。まあ、今更バイト先を変えるのは面倒だから、辞める気はない。一つ救いなのは、客が増えても値段の高いこの喫茶店には学生が来ないということ。学校の有名人である西崎さんとの関係が、他の生徒に知られる事はない。

「そう言えばさ、私はよしと君のこと、よしと君って呼んでるでしょ？」

唐突に何を言っているんだ。

「うーん。私って学校では笑ちゃんって呼ばれてるんだけど……」  
知ってる。由来も知ってる。

「よしと君にもそう呼んで欲しいなって……」

またそれか。だが断る。女性慣れしていない俺には『ちゃん』だなんてフェミニンな響きはむずかゆい。西崎さんのままでいいじゃないか。

「だって、なんか他人行儀なんだもん。もつとよしと君と仲良くなりたい」

もう十分、仲が良いと思う。最近だと男友達よりも彼女とよく話している。これ以上となると、まるで恋人同士のようにじゃないか。これが人気者のコミュ力か。これで何人の男が勘違いしたのだろうか。せめて春子とかで勘弁してくれ。

「春子？ ……春子か。いいよそれで。ちよつと恥ずかしいけど」

恥ずかしい？ ああそうか。普段は愛称で呼ばれているせいか。それにしてもなぜ、彼女は顔を赤らめているのだろうか。しよつちゅう告白されている西崎さ……春子にとっては、男から名前と呼ばれる

事など慣れているだろう。

「慣れてなんかないよ。こうやって男の子と話すのだってほとんどないし」

そういえば、春子に告白して成功した男子はいないという噂がある。あれは本当だったのか。最近ではファンクラブが結成され、告白すら制限されている。

「だって知らない人から告白されても困るもん。あ、でもよしと君は知らない人じゃないから……！　って！　何言ってるんだろ私！」

そう言つて誤魔化すように、手のひらで顔を仰ぐ。なぜだかよく分からないが、これ以上この話をしてはいけない気がして話を逸らした。違う話をしているのに、『春子』と彼女の名前を呼ぶたびに、先ほどと同じようにこそばゆそうに笑っていた。

## 第二話 お前とは付き合わない

俺は作田吉利(さくた よしとし)。生涯普通の人生、その目標に向かい日々努力をしている。そんな俺だって恋愛には興味がある。好みの女性は、誰からも認知されない存在感の薄い人だ。

中学3年生の頃、同じクラスにその条件が当てはまる人物が居た。いつも教室の隅で読書をして、もう3年生にもなろうと言うのに特別誰かと馴れ合おうとしない。大抵そういう人物はいじめなどの対象になるが、彼女は「あの子暗いよね」と陰口を叩かれる程度。絶妙な目立たなさだ。当時の俺は、彼女と話す切っ掛けが欲しかった。そんなある日、彼女が俺の知っている本を読んでいた。これは好機と思いい、中学生童貞男子の勇気を一滴残らず振り絞り声を掛けた。するとどういう訳か、クラスで目立つグループの女子達が、一齐にその子の周りに集まり「私もその本知ってる」「へえ、私も読んでみようかな」などと盛り上がり始めた。不思議なことに、それは陰口を言っていたグループだった。この時なにか起きたかと言うと、そのグループは彼女に元々興味があったのだ。陰口だってその裏返しだ。つまり、俺以外にも彼女と話したい人物は沢山いたのだ。誰かが話し掛けた事で、奇しくもそのきっかけを作ってしまった。その女子生徒は家庭の事情で付き合いが悪かっただけだと発覚し、目立つ女子のグループにそのまま加わった。取り残された俺は、ただ自分の席に戻るしかなかった。アイソープオスの『犬と肉』を知っているだろうか。肉を啜えた犬が、川に写り込んだ自分を他の犬と勘違いする。そして水面に写った肉を奪おうと、川に向かって吠えたそうだ。すると水の中に肉を落とすしてしまう。この物語の教訓は『欲張ると、何もかも失う』だそうだ。俺はそんなに欲張ったのだろうか。なにもせずとも肉は川に自ら落ちて、魚の群れとともに泳ぎ去ってしまった。この事件は、当時の俺の日記に『アイソープオスは教訓にすぎず』と言うタイトルで鮮明に記されている。

結局なにが言いたいのかというところ、俺の理想である目立たず平凡な女性というのは、恋愛するにあたりそう簡単ではないのだ。いや、恋

愛自体が難しいものなのかもしれない。だからこそ、まるで未知の現象であるそれに対し、慎重であるべきだと判断した。自惚れに聞こえるかもしれないが、一際目を引く女性から好かれる可能性だってゼロじゃない。だから俺は女性との関係を持たないようにはしていた。特に西崎春子（にしぎき はるこ）。彼女なんて論外だ。笑（えみ）ちゃんの愛称で学校中から好かれている。ファンクラブなんて怪しい組織まで、結成されている。彼女と親しいというだけで、名前が知れ渡りかねない。道端に転がる石ころのように、人から関心を持たれずに生きていきたい。そんな俺にとって、彼女は最悪な相手だ。



夏の終わり頃、夕方になると半袖を着てきたことを後悔するような季節になった。俺の生活は髪型から何まで変化がない。今日も放課後に喫茶店・六連星（すばる）でアルバイトをしている。

アルバイトが終わると、これまたいつも通り春子と他愛もない話をする。しかし最近の彼女に対し、俺は違和感を感じていた。彼女の方を見ると高い確率で目が合うし、話している間もちよつとしたボディタッチが増えた。親しい相手には分け隔てなくそう接しているのかもしれないが、それにしたって心を開きすぎたかもしれない。本来彼女のような人間とは関わらないと決めていた。これからは少し距離を置こうと考え、その日は早めに帰ることにした。

「もう帰るの？ ちょっと待ってて、途中まで送るから」

それは男子が言う台詞だろう。途中まで送らないといけないほど、俺は弱くない。断ろうとしたが、彼女は早々にエプロンを外し、外に出る準備をしていた。彼女と一緒に歩いているところなど、誰かに見られようものなら大変なことになる。

「大丈夫だよ。外暗いし顔なんて見えないよ」

春子に言われて外を見ると、太陽はほとんど沈んでいた。そうか、こんなに日が短くなっていったのか。これなら大丈夫だろうと、一緒に外を歩くことにした。

街灯の光が、風景に溶ける程度の薄暗い夜道。春子は俺の隣を歩く。肩が触れそうなほど近くを歩く彼女から距離を取っていると、随

分端に追いやられてしまった。

「なんでそんなに端っこ歩くの？」

分かっていて聞いているのか、からかうように微笑む。春子の代名詞とも呼べるこの笑顔。そういえば、彼女は どうしてこれほど笑うのだろうか。少し気になって訪ねてみた。

「私のお母さんがね、よく笑う人だったの」

『だった』ということは、もう亡くなっているのだろうか。

「うん。すごく綺麗な人で、私の憧れだったの」

なるほど、春子は亡くなった母の影響を強く受けているのか。悪いことを聞いてしまったと謝ると、彼女は「ううん、いいの」と笑顔で答えた。

「お母さんはね、幼い頃の私に『辛い時や悲しい時でも、笑顔でいれば幸せになれる』って教えてくれたの」

そう言っただけでまた微笑む。ああ、やはり悪いことを聞いてしまったなと反省した。春子の母は、彼女の人格に影響を与えるほどの存在だったようだ。

「お母さん凄くモテたんだった。でもね、短い生涯だったけど、お父さんだけを愛したの。それってかっこいいなって思う」

お父さんとは喫茶店・六連星のマスターの事だ。独特の雰囲気を持つているとは思っていたが、若くして妻に先立たれていたとは。

「だから私も、好きな人のことは一途に愛せたらなって思う」

そうか。だから恋愛の経験がないのか。一途というのは簡単じゃない。適当な相手を選んでも、すぐに別れてしまうだろう。

「ねえよしと君。男の子的にはどうなの？ こういうのって重いのかな」

男代表みたいに言われても、恋愛経験のない俺には分からない。だが俺は恋愛脳ではないから、ころころと相手を変えるなんて面倒だ。その点、同じかもしれないな。

「そうなんだ。私たちって似たもの同士かもね」

いや、やっぱり全然違うな。春子には選択肢がある。俺はそんなにモテる訳じゃない。一途なものにも、多くの恋愛を経験できるほどのス



ペックがない。

それにしても今日は疲れた。恋愛の話なんて、慣れないことをしたせいだ。もう直ぐアパートに着くので、送ってもらうのはここまでで良いだろう。

「よしと君の家つてこの近くなの?」

俺は小さなアパートの2階で、一人で暮らしている。両親は出張で遠くに住んでいるし気楽なものだ。

「え! 一人暮らしなんだ。凄い」

いや話を広げようとするな。もう暗いし早く帰れ。

「あ、そうだ。少しお邪魔してもいいかな」

さつき一途な性格って言うてなかったか? なんだその軽さは。一人暮らしの男の部屋に上がろうとするなんて、危険すぎるだろ。とにかく彼女には帰ってもらおう。

「ちえ……。まあ今日はいいか。また明日ね」

春子はようやく諦め、ひらひらと手を振りながら来た道に戻って行った。なんなんだ一体。まさか家にまで上がり込もうとするとは。彼女との接し方を、少し改めた方が良くもしいれない。

昨日、春子に一人暮らしをしていると伝えたが、それを聞いたマスターが夕食を用意してくれると言った。まかないと言うよりは、娘の友人に料理を振る舞う感覚らしい。毎日弁当やカップ麺で暮らしている俺には、正直ありがたいお誘いだった。しかし少々、恩が過ぎる気がする。ここまでされると恐縮してしまう。

店の後ろにあつたドアの向こうは、普通のリビングになっていた。春子やマスターの部屋は2階にある。マスターは相変わらず無口で、料理を出すとさつきと自分の部屋に戻った。

マスターの料理は美味しかった。こんなに美味しい料理を食べたのは、久しぶりだ。少しだけ、両親が恋しくなった。

「お父さんの料理、これでも昔は酷かったんだよ。お母さんが居なくなつてからは、私に気を使っているいろいろ頑張ってるみたい」

そうだったのか、良い父親だな。女性は父親を見て、男の見る目を

養うそうだ。マスターを見て育ったのなら、変な男に引つかかることはないだろう。

食事が終わり、満腹感から無駄に時間を浪費したくなる。ファミレスで何時間も居座るあれだ。春子は飲み物を持ってくると言って冷蔵庫を漁っている。

「烏龍茶と……あと高そうなジュースがあるけど、どうする？」

高そうなジュースってなんだ。すごく気になる。だが夕食を振舞ってもらった上に、高い飲み物を所望するのモどうかと思ひ烏龍茶を選んだ。春子は飲み物の入ったグラスをテーブルに置くと、俺の隣に座った。「かんぱーい」と言つてグラスを当ててくる。何に對しての乾杯なのか。

「このジュース味が変だけど美味しいかも。高いだけあるね」

……ん？ 待て、そのジュース匂いがおかしくないか？ 気づけば春子の顔がみるみる赤くなつていた。半分以上減つたグラスを取り上げて少し舐めると、それにはアルコールが含まれていると分かつた。これ酒じゃないか！

「うくん……よしとくん」

氣だるそうにもたれかかる春子を押し返そうとする。だがそんなことをしたら、椅子から転げ落ちてしまひそうだ。密着した彼女の体から、体温が伝わってくる。完全に酔つ払つているようだ。

「よしとくん……ねえ聞いてる？ ねえ……好きなの」

よし、今のは聞かなかつたことにしよう。

「ねえつてばあ……好きなのお……付き合つてよ」

俺は全力で目を逸らし、先ほどから環境音を奏でる換氣扇を眺める。冷や汗が止まらない。酔つた勢いで、とんでもない事を口走つてゐる。これには参つた。完全に油断してゐた。恋愛とは、俺にとつて未知の現象である。それ故、女性と接する時は細心の注意を払つてきた。しかし学校の人気者である彼女が、まさか自分を好きになるとは思ひなかつた。それが今の結果を生んでしまつた。男を見る目とはなんだつたのか。マスターの背中を見て育つた彼女は、なぜ俺なんかに惹かれたんだ。

そうだ、彼女は酔っていた。きっと明日になれば忘れているだろう。そうに違いない。春子を抱きかかえソファに寝かせる。離れようとしないう彼女を無理矢理ひっぺがし、その日は帰宅した。

次の日、学校の廊下で春子とすれ違った。学校では声をかけない約束なので、お互いに言葉を交わすことはない。しかしすれ違う一瞬、彼女は顔を赤らめて微笑んだ。昨日のことを覚えているのだ。アルバイト、辞めるべきだろうか。

春子が酔っ払った勢いで俺に告白してから1週間ほど経った。俺はまだ喫茶店・六連星で働いている。新しい環境を探すのが億劫で、結局ここを辞めていない。春子とは、あの後どうなったかという俺にも分からない。彼女にとっても気まずいのか、店の手伝いにも来ていない。

それにしても、今日は風が強い。天気予報が言うには、台風が掠るそう。こういう日は客が少ないので、むしろアルバイト日和と言える。と思っていたが、強烈な雨が降ってきた。この横から殴りつけるような雨の中、帰宅するのは難しい。

「今日は、うちに泊まっていきなさい」

明日は休日なので泊まっていても問題ないが、気になるのは春子だ。

「あの子も問題ないと言っていた」

先に話を通っているところを見ると、提案したのは春子かもしれない。マスターは妻の死後、娘である春子が何か不自由していないか常に心配している。それ故に、春子の意思を尊重する傾向があるのだ。まあどちらにせよ、この雨の中帰るのは無理だ。お言葉に甘えて今日はここに泊まるとしよう。

夕食を食べている時も、春子とはあまり言葉を交わさなかった。正直気まずい。風呂から上がり、狭いリビングでテレビを見てみると、春子が2階から降りて来た。彼女は水色のパーカーに、白いズボン履いていた。これが彼女の寝巻なのだろう。そのままコンビニに行けそうな汎用性がある。

「2階来て」

春子はそう言つて、階段の下で手招きをしていた。そういえば、2階には行ったことがない。前に春子の自室があると言つていたが、本当に行つて大丈夫なのだろうか。しかし話があるのだろうか。俺は彼女の言う通り、階段を上つた。2階には3つの扉があつた。春子の部屋、マスターの部屋、あとは書庫かなにかだろう。

「ここ私の部屋。入つて」

言われるがまま部屋に入る。女子の部屋には初めて入つた。なんだか良い匂いがするし、リビングなどと同じ照明なのに明るく見えた。正直、緊張する。

「寝る時は、そのベッド使つていいから」

ああ、それを言いたかつたのか。変に心構えをして損をした。正直俺はもう眠かつたので、何も考えずベッドに横たわる。うん、枕も良い匂いだ。……待て。これは春子のベッドだろう。

「いいよ使つて」

まあ、春子が良いと言うのなら良いのか。きっとどこかに布団があつて、彼女はそこで寝るのだろう。俺が眠そうにしているのを見て、春子は電気を消してくれた。

しばらく横になつてしていると、とある異変に気付いた。……おかしい。春子が出て行く音がしない。どうしたのかと思ひ体を起こそうとすると、ベッドが少し沈んだ。いや、待て。待て待て待て待て待て！ 春子が、俺が寝ているベッドに滑り込んできた。

「ねえ、よしと君」

そう囁いた春子の声は、俺の鼓膜をくすぐつた。この状況は想定していなかった。そうだ。寝たふりをしよう。俺はベッドに横たわつた瞬間に、生き絶えたのだ。そういう設定でいこう。そんな事を考えていると、春子が俺の背中手に手を当ててまた囁いた。

「あの夜の事、私は覚えてるよ。酔つ払つてたから忘れてると思つてるかもだけど、はつきり覚えてる」

背中に当てられた彼女の手が、かすかに震えている。彼女は友人という壁を越えようとしている。それはとても勇気があることだ。

「ねえ、起きてるんでしょ？ そのままでいいから聞いて欲しいの。私はよしと君の事が好き……愛してる。あと恋人になりたい」

ああ、やつぱりこうなるのか。後ろに居る彼女は今、きつと笑顔を浮かべているのだろう。気まずいまま空中分解してくれば良いと思っていたが、人生は都合よくいかないものだ。止まったように見えた俺たちの関係。それは春子がゼンマイをゆっくりと回していただけで、彼女のさじ加減で簡単に動き出したのだった。

「聞いてないふりしても無駄だよ。もう言っちゃったから、開き直って何度でも伝えるから」

なんて恐ろしい事を思い付くのだろうか。俺の恋愛に、春子のような華やかな存在はいらない。俺は透明になりたいのだ。近くで光を放たれると、光は屈折し雨上がりに出来る虹のように無数の色を作り出す。人の目に触れてしまう。だから俺は春子とは付き合えない。

寝たふりを続けていたが、本当に眠くなってきた。もう考えるのは辞めよう。そうして肌寒いはずの夜は、春子の体温に溶かされるようにまどろみの中に消えていった。

朝、ドアを開ける音と「朝食が出来たから起きなさい」というマスターの声が聞こえた。目をゆっくりと開ける。マスターに返事をしようと思ったが、もう出て行ったようだ。それにしても随分と暖かい朝だ。……おい。どうりで温かいと思った！ 春子のやつ俺に抱きついたまま寝やがった。それよりもマスターはなぜ無反応なのだろう。放任主義にもほどがある。



私の名前は西崎春子。私はお母さんに憧れていた。綺麗な髪も、すらっとした体型も、穏やかな表情も。そしてなにより笑顔が素敵な女性だった。けどお母さんは私が9歳の時に、心臓病により他界した。当時の私は泣く事しか出来なかった。

お葬式ではお母さんの顔を直視出来ず、花を添えられなかった。その後も、お仏壇に飾られた写真を見るたびに涙を流した。そんな私に、お父さんはあえてお母さんの話をした。口下手なお父さんが丁寧に話す姿を、今でも鮮明に覚えている。両親の出会いが中学時代。同

じクラス、隣の席。2人は自然と惹かれ合い、恋に落ちた。その関係は大人になっても続き、結婚した。生前、お母さんは生涯一人の男しか愛したことがないと言っていた。お父さんの話を聞いているうちに、私はお母さんへの憧れを思い出していた。そしてお母さんが私に言った言葉も。

『辛い時や悲しい時でも、笑顔でいれば幸せになれるの。あなたにはずっと笑顔でいて欲しい』

私はお母さんの前で、なんて顔をしていたのだろう。お父さんの話が終わると、私はお仏壇の前に座りお線香を焚いた。この時初めて、私はお母さんの写真に微笑みかけたのだった。そうして私の心には、新たな憧れが生まれていた。それは一途な愛への憧れ。今思うと少女漫画を読んだ時のような、単なる恋愛への憧れだったのかもしれない。

小学生の高学年になった頃、私は悲しい現実に向面した。クラスの女子たちが男子の話で盛り上がる中、私は彼女たちの気持ちに全く共感が持てなかった。かっこいい男子、やさしい男子、そんなことを言われても心が動かない。

中学に入り、お母さんとお父さんが出会った年齢になった。私はきつと、誰かを好きになるのだろうと思っていた。だけどそんな日は来なかった。私は一つの結論に達した。私の中には恋愛感情はなかったのだ。一途な恋愛に憧れたが、私の心は、恋すら出来ない欠陥品だった。恋愛感情なんて湧いてこない。だけど少女漫画の王子様を夢見るように、一途な恋への憧れが捨てきれない。きつとそんな噛み合わない状態で、誰とも付き合わず大人になる。そして、憧れなどどうでもよくなる年齢になって、ようやく誰かを妥協で受け入れるのだろうと半ば諦めていた。

高校に入ると、現実なのかと疑うほど告白されるようになった。お母さんみたいに身長が高くはなかったけれど、両親のいいところを受け継いだと思う。知っている顔から知らない顔まで、様々な男子から

告白された。でも彼らにはなんの興味もなくて、一つ一つ断る毎日だった。

そんな中、少し強引に迫ってくる男子が居た。私はそれ以来、怖くなくなってしまった。友達に相談すると、その子が代わりに断ってくれると言ってくれた。その後、ひとつ上の先輩からの告白を、友達が代わりに断ってくれた。しばらくして、その先輩と断ってくれた友達が付き合い始めたことを知った。呆れた。結局誰でもよかったのだ。私は男子への信頼感すらもなくしていた。

家に帰り、いつものように家事をする。放っておくと、お父さんが全てやってしまう。あの人にはあまり負担をかけたくない。食器を洗おうと洗剤を手に取ると、中身が空になっていることに気が付いた。買い置きがなかったかと思い、下で喫茶店をやっているお父さんに聞きに行く。喫茶店とリビングを繋ぐドアを開け、お父さんに食器洗剤はないかと聞いた。その時間はいつもお客さんは少ないし、裏でのやり取りなんて聞こえない。だけどその日は、カウンターの内側に一人の男の子が立っていた。身長は結構高い。あとパーマのかかった少し長い髪の毛が、印象的だった。家族のちょっとした会話を他人に聞かれたのが恥ずかしくて、私はリビングに逃げた。なぜだろうか、彼の風貌というのだろうか。それが妙に気になった。あとからお父さんに聞いてみると、最近アルバイトとして雇ったらしい。彼のことを、どこかで見たことがある。明日友人に聞いてみよう。

翌日、友人に彼の特徴を話し、知っているかと尋ねてみた。友人が言うには、隣のクラスの男子だそうだ。彼の名前は作田吉利。いつも教室の隅で本を読んでいて、2人の友人がいるが、それ以外の生徒とは関わりを持つとうとしないらしい。不思議な人だなと思った。そしてなぜだか、少しだけ彼に興味が湧いた。

学校から帰り喫茶店を覗いてみると、彼は今日も働いていた。どうせお客さんもいない。せっかくの機会だから話し掛けてみた。最初に簡単な自己紹介をした。彼は前髪で半分隠れた瞳で一瞬私を見た後に、知っていると答えた。私は学校では、結構な有名人なのだ。そう

して彼と軽く話した。少しだけ、少しだけだけど、この時間が楽しいと感じた。

それから私は、彼ともつと話がしたいと思い、お客さんの少ない時間を見計らって会っていた。その頃になると、私は彼をよしと君と呼ぶようになっていた。話すうちに、よしと君のことが少しわかった。彼は目立つのが嫌いだそう。それが理由で、身長が高いことと、天然の巻き髪がコンプレックスだと言っていた。髪を気にして、指で前髪を引っ張っている姿がちよつと可愛い。

毎日会って話していると、必然的に彼と仲良くなった。今まで、こんなに仲が良かった人が居ただろうかと思えるほどだ。でも未だに彼は、私のことを『西崎さん』だなんて他人行儀な呼び方をしていた。私はよしと君ともつと仲良くなりたかった。だから学校で呼ばれている笑ちゃんと言う、本名と全く関係のないあだ名で呼ぶことを提案した。よしと君は『女の子をあだ名で呼ぶのが恥ずかしい』という理由でそれを断った。今まで出会った馴れ馴れしい男たちはなんだったのかと思えるほど、硬派な男子だ。彼は妥協案として『春子』と私を呼んだ。春子……。ただ名前を呼ばただけなのに、顔が熱くなる。私は、それでいいと答えた。彼との会話で、『春子』と名前を呼ばれるたびに、心臓が跳ね上がるのを感じた。幼稚な表現で言うと、彼にドキドキしていたのだ。

気付いてしまった。私はよしと君に対して、完全に恋愛感情を抱いている。気付いてしまうと、もう止まらない。寝ても覚めても、彼のことしか考えられない。彼の仕草ひとつひとつが頭から離れないのだ。恋ってこんな感情だったんだ。苦しいようで嬉しいような感情が、私の心を支配する。私は大きな勘違いをしていた。お母さんは一人しか愛さなかったんじゃない。一人しか愛せなかっただけなんだ。恋愛感情が湧かない？ 当たり前だ、私はよしと君と出会っていなかったのだから。

その後、私はジュースと間違えてお酒を飲み、酔った勢いでよしと君に告白してしまった。まあいいか。言ってしまったものは仕方が



ない。むしろいい機会かもしれない。どうせよしと君は私の気持ちを知ってるんだ。仲が良いことを利用して、どんどん思いを伝えていこう。

### 第三話 面白いやつだ

俺は作田吉利（さくた よしとし）。誰の記憶にも残らない人間になるために、平凡な生活を送るよう心掛けている。俺が小学生の頃に卒業文集で書いた、『透明人間』にはこのような一節が書かれている。『サラリーマンの帰宅時間、つり革にもたれかかった、疲れた顔をしたスーツ姿の中年男性。の隣に居る全く印象のない人物を、白く濁った液体に例える。その液体を、砂利のぎつしり詰まったタルへ流し込む。タルの中で濾過され、透明になった液体。それが作田吉利である』

特に心に響く一節というわけではないが、これこそが子供の頃から変わらない俺の本質だ。だが平凡というのはなかなか難しい。誰とも関わりを持たないと、それは孤立という存在感を放つ。かといって人脈を広げすぎると、人に認知される数も増えてしまう。極度に嫌われているのも良くない。他人に強く意識されている状態だからだ。

俺は2年生になり後輩というものが出来た。その中に安藤杏（あんどう あん）という女子生徒がいる。彼女は髪を明るく染め、女子としては高めの身長だ。西崎春子（にしざき はるこ）のことを可愛いと表現するならば、彼女は美人と表現するのにふさわしい。そのモデルのような外見から、入学当初から男子生徒の間で噂になっていた。しかし、いかんせん外見どおり性格がきつい。春子と違い、誰からも愛される存在にはならないだろう。本人にもなる気はないようだ。それでも隠れたファンがいたり、なかなかの人気者。目立ちたくない俺にとって、あまり関わりたくない存在だ。ではなぜ彼女の名前を出したかという点、それは彼女が俺のことを極度に嫌っていたからだ。一人に嫌われると、感染症のように広がりかねない。平穏な学園生活を送るには、どうにかしなければならぬ問題だった。



高校2年生になっても、変わらない学校生活を送っていた。学校では春子との接触がないので、本当に平和である。なので春子とその後どうなったかという話は、今は置いておこう。

ところで、どこの高校もそうかもしれないが、変なあだ名の人間が多数居る。名前をいじったものはまだ良いが、最寄駅や、好物である食品名まであだ名になっているのもう分らない。そういえば、春子は今でこそ『笑(えみ)ちゃん』というあだ名だが、中学時代は『サンちゃん』と呼ばれていたらしい。サンは太陽を英語にしたもので、太陽のように明るく笑うという理由だった。しかし、当時春子のが好きだった男子の一人が、とあるお笑い芸人の芸名にちなんで『サンシャイン西崎』と言ってからかった。春子はそれをひどく嫌い、その男子生徒は女子たちから酷く反感を買った。そして、その男子生徒には戒めとして『サンシャイン』というあだ名が付いた。そんな感じで、他人から跳ね返ったあだ名なんてものもある。

話は変わるが、俺は同じクラスに2人だけ男友達がいる。その一人が、今まさに俺の席に近づいて来た人物だ。

「よー、よしと。昨日送ったURL見たか？ あれめっちゃエロいよなー」

悪いな平社員。お前からのメッセージは、俺のスマホには表示されないんだ。不思議だな。ちなみに平社員というのは、こいつのあだ名だ。本名は忘れた。外見はそうだな、少しチャライ短髪のサッカー選手を想像して欲しい。それを黒髪にして、全体的に汚くまとめたのがそれだ。

そういえば、先ほどの話には続きがある。サンシャインと名付けられた男はその後、それすらもおこがましいという理由で、平社員という名前に変質した。口を開けばセクハラな発言をするので、女子からは非常に嫌われている。

そしてもう一人。

「やあ、昨日貸したポテトチップスどうだった？」

貸したってなんだ。食べたし美味しかったが、返す気はないぞ。

「ええ、全部食べちゃったの？ ついに君も、こっち側の人間になってしまっただね」

勝手にそっち側に引きずりこむな。俺はお前のように、体重の限界に挑戦したりはしない。こいつはデブ。本名は忘れた。身体的な特

徴を使ったあだ名を聞いて、気分を害した人がいるかもしれない。だが心配はいらない。彼は太っていることに誇りを持つている。むかし教師の一人が、彼をデブと呼ぶ生徒たちに説教をした。その教師に対し、彼は「デブを悪口みたいに言うな」と説教をしたのだ。今更だが彼の外見について説明すると、デブである。それ以外に、彼自身が強調していかないのだから仕方がない。

この2人の友人、一見特徴的で注目を集めるように見えるだろう。しかし春子と比べてどうだろうか。多くの人にとって、興味が湧かなかったのではないだろうか。このように、俺よりもキャラが強いが、興味が持てるかというところでもないという貴重な存在である。

平社員、デブ、俺の3人で、朝の脳が働かない無駄話をする。すると誰かが、俺たちの様子を伺っているのに気が付いた。それは女子の3人組だった。こういう輩はたまにいる。狭いコミュニティというのは、時に羨ましく見えるものだ。ちよつとした人間関係に嫌気でもさしたのだろう。俺たちみたいな底辺に、気まぐれで絡もうとしたのかもしれない。だが残念だったな。この壁を突破出来た者などいない。

「おはよー。作田くんたちって、いつも3人で居るよね」

見ると女子3人組の中心に居るのは、俺が中学時代に声を掛けようとしていた女子だった。しかし時の流れとは悲しいかな、教室の隅で本を読んでいただけの彼女は、今やかわいい女子グループに所属している。まあ今後彼女と関わることは無いだろうから、名前や特徴は割愛させてもらおう。

「休日、なにやってるかって話してたんだ」

平社員がそう答えると、彼女たちもその話に食いついた。

「へえ、作田くんは休日なにしてるの？」

なぜか俺を指名してきたが、平社員が真つ先に手を挙げる。こいつは女子相手には、全力でアピールしようとするのだ。

「君たちは休日何してるの？ 彼氏いる？ みんなおっぱい大きいし、彼氏いそうだな。ちなみに俺は彼女とかいないから、休日空い

てるぜ！」

さらつとセクハラを混ぜるあたり流石だ。彼の女子への興味は果てしなく、その勢いはどんな女子もこう言わせる。

「へ、へえ……そうなんだ……」

ちなみに普段は平社員と呼ばれているが、女子の間ではセクハラ大臣だなんて呼ばれている。随分と出世したものだ。そしてデブも発言しようとしている。行け、お前の力を見せてやれ。

「お、俺は日曜日だけでポテトチップスを10袋も食べちゃったよ。お陰で胸焼け気味だけど、この体重を維持するためには今日もいっぱい食べないとね」

なんだその意識の高さは。あまりに油っこい話題に、聞いていた女子たちが胸焼けしているじゃないか。

「そ、そうなんだ。すごいね。あ……チャイム鳴っちゃうから、私たち席戻るね」

女子たちは下がりきったテンションを、苦笑いでごまかしながら去って行った。平社員とデブのコミュニケーションカウンターにより、撃退に成功した。やれやれ、こいつらの面白さが分からないとは。

このように俺は、2人の素晴らしい友人のお陰で、狭い人間関係を保っているのだった。

今日はバイトがないので、放課後は直帰を決め込んでいた。教科書やノートをかバンに詰め込み、それを担いでさっさと教室を出た。階段を降りたところで、一人の女子生徒とばったり出会う。この学校は、学年を上履きの色で分けている。今日の前に居る女子生徒の上履きは、1年生のものだ。

「うわ、先輩じゃないですか」

ドン引きしながら俺から距離を取る後輩。彼女の名前は安藤杏。この後輩との関係を、説明するのは難しい。彼女は身長が高くスタイルが良い。ファッションにも詳しく、1年のオシャレ番長である。髪は原色を抑えた上品な茶色で、背中に当たる程度の長さだ。腕には髪留めやら色々巻かれている。普段髪を結んでいないのに、どうしてあ

んなに持ち歩いているのだろうか。説明を見て分かる通り、それなりに目立つ側の女子である。本来であれば、こういうやつとは関わらないのだが、色々あったのだ。

「先輩、もしかして私が帰るの待ってたんですか？ マジでストーリーじゃないですか！ キモいんで近づかないでください」

うん。彼女は俺を勘違いしている。彼女の中では、俺が彼女のことを大好きだということになっている。

初めて安藤杏と出会ったのは、2年生になったばかりの時だった。1年生は入学式の後、購入したばかりの教科書を持ち運ぶという苦行を行う。俺は2年の男子トイレが混雑していたことにより、下の階まで降りてきていた。廊下には教科書を重そうに運ぶ1年生たちの姿があつた。その中に、教科書を落としてしまった女子生徒が居た。その女子生徒というのが、安藤杏だった。1年にしては大人びた顔立ち。誰が見ても美人と呼べるその女子生徒は、男子の視線を一身に集めていた。1週間もすれば、他の学年の男子の間でも噂になるだろう。俺は全力で関わりたくないの、その生徒をスルーした。あれだけの美人だ。きっと誰かが教科書を拾ってくれるだろう。そう人任せにして彼女の横を通り過ぎようとすると、俺の足になにかが当たった。それは教科書と一緒に、女子生徒が落としたボールペンだった。流石にこれを拾わないわけにはいかない。渋々ボールペンを拾い上げ、持ち主に渡した。

「ありがとうございます」

彼女はそれだけ言っ、拾い終わった教科書を抱えそそくさと立ち去った。

これが安藤杏という後輩との出会い。なんの変哲もなく、発展性もない。だがそこから不思議な偶然が続く。その日からどこへ行くにも安藤杏と遭遇した。俺は気付かないふりをしたが、彼女は不快に感じていたようだった。

その日も偶然、廊下で安藤杏と遭遇した。いつものように見て見ぬふりをして、どこかへ退散しようとした。だが彼女から引き止められ

た。

「ちよつと話があるんですけど、いいですか？」

威圧的な声だった。表情からも嫌悪感が感じられる。放っておくとまずいと思い、彼女の話の話を聞くことにした。連れて来られたのはとあるロッカー前。立ち入りが禁止された空き教室の横にあるので、滅多に人が来ない。

「結論から言いますけど、私あなたのことが嫌いですから。付き合えませんかよ」

なぜか振られた。というか、言っている意味がまるで分からない。「とぼけるんですか？ 先輩、私に付きまとしてますよね」

なるほど、そういうことか。俺が故意的に彼女と接触していたと勘違いしたのか。さてどうする。平社員が前に、かわいい女子がいると言って安藤杏の名前を出していた。彼女はすでに、2年の中でも話題になっている。目立ちたくない俺にとって、こういう人間とは関わりたくない。だが、嫌われるのも問題がある。適当な噂でも立てられようものなら、女子のネットワークにより俺の存在が広く知れ渡ってしまうのだ。

考えた末、辿り着いた答えが謝罪であった。なんの感情も込められていない謝罪。曲げた腰の角度は90度。それでもこういう場合は、言い訳よりかは効果がある。

「……もういいですよ。今後は付きまとわなないでくださいね」

彼女はそうばっさりと言い捨てて、気が済んだのかそのまま去って行った。とんだ災難に見舞われたものだ。もうこんなことは、起こらないでもらいたい。そんな俺の願望に、運命は逆行する。

「先輩……あなたのことは嫌いって言いましたよね」

そう、次の日も、はたまたその次の日も、安藤杏とばったり出会ったのである。今度こそ言い訳をしないと、彼女の中の嫌悪感が臨界点に達してしまう。そこでふと思いついた。彼女は俺を完全にふっている。と言うことは、今後恋愛関係のトラブルには発展しない。つまり、春子のようにはならないのだ。ならば積極的に関わって、俺のこ

とを知ってもらった方が誤解は解けるといふものだ。謝罪からの許しではなく、信頼からくる許しである。となれば、まずは自己紹介だ。「は、はあ、私は安藤杏……ってなに突然自己紹介してるんですか。釣られて私も名乗っちゃったじゃないですか！」

あ、こいつ多分面白いやつだ。

その後も安藤杏との謎の遭遇は続き、その度に俺は彼女に話題をふった。そんな俺に対し、彼女はついつい話に乗ってしまった。和解の道が見えてきた。春子の会話術を参考に、彼女を杏と親しみを込めて呼んでみたりした。そんなことを続けていると、結構仲良くなった。だが未だ解決されていない問題がある。

「もう先輩！　どんだけ私の事好きなんですかあ」

この誤解、未だ解けず。

さて、今日も杏と遭遇したわけだが。もう流石に、俺を貶めるほどの嫌悪感を持つてはいないだろう。ならばわざわざ関わるメリットもないので、スルーして帰ろう。と思つたが杏に腕を掴まれた。

「いやいや、いくら先輩でも好きな人の前で緊張して喋れないって、男としてどうなんですか」

別に好きじゃない。まあいい。引き止められてしまったし、何か適当な話題でもふつてさつきと帰ろう。確かこいつはファッションに興味があるんだつたな。その話でもするか。

「私の私服ですか？　口で言っても伝わらなそうですし……あ、写真あるので」

ポケットからスマホを取り出す杏。やはり好きな話題だったようだ。だが突然、スマホをいじる手を止めた。

「先輩、私の画像が欲しかっただけじゃないんですか？　後から、画像送れって言い出すんですよ。私の画像を何に使う気ですか！」

何手先まで読んでいるんだこの娘は。だがその読みは、初手から間違えている。面倒になってきたので、話を逸らす。そうだ。俺は無難な服を選んでるつもりだが、ファッションには疎い。変な服を着て目立っても困る。ファッションに精通している彼女に聞くのは、得策



かもしれない。

「男性の服ですか？ 先輩変な服着てそうですね。しょうがないですね、今から駅前と一緒に買いに行きますか？」

いいのか。正直助かる。自分一人で買った服は、高い確率でダンスに引きこもる。それは経済的にも良くない。

「じゃあ行きま……あ、デートじゃないですかこれ。これが狙いだっただね。先輩のラブマインに引つかかるところでした」

ラブマインってなんだ。お前は自分の仕掛けた罠に引つかかっているだけだ。杏は、ぱたぱたと手を動かして動揺している。彼女は美人だが、こうやって見ると中身は年相応なのだと感じた。

「ま、いいですよ。先輩も、着る服がないと困っちゃいますからね」

こういう面倒見の良いところも含めて、彼女を気に入っている。なにより杏は、俺を振っている。恋愛とは一切無縁の女友達として、気楽に接せられるのは良いことだ。

俺と杏は、駅前のショッピングモールへ行き服を買った。杏の好みなのかゆったりめのシャツに、細身のズボンという組み合わせになった。色はモノトーンばかりで、普段着とあまり変わらない。あと杏の服も買った。あれだけ俺のセンスを疑っていたくせに、最後は俺が選んだ服を購入していた。相変わらず変なやつだ。

そういうえば、行きたいところがあったんだ。服を選んでくれたお礼もしたい。

「え、おごつてくれるんですか？ なんか怖いんですけど」

こいつは何を警戒しているんだ。このカフェに行きたいだけなのだが。杏にスマホの画面を見せる。そこには、行きたい店のメニューが映っている。この苺のパフェが食べたいのだ。男だけでは頼みづらいし、量も多い。

「……っ！ これ、カップルで食べるやつですよ！ まさか、これが目的だったんですか！ 流石に引きますよ……」

違う、そつちじゃない。隣のやつだ。そんな悪趣味なハート形のオブリエが付いたパフェを、食べたいだなんて言うものか。

「ま、まあ、いいですけど……先輩がどうしても行きたいなら……」  
やつと理解したか。じゃあ早速行こう。

全体的にパステルカラーのカフェは、店内の雰囲気もなかなか良い。……うん。なぜだ。俺の目の前には、ハート形のオブジェがある。これパフェ？ まあ、犯人は知ってる。こいつだ。

「だって……先輩これが目的っぽかったし、あんまり否定するのもかわいそうだって思ったんです」

いや、俺はもつと違うものが食べたかったんだ。こいつ俺の話、全然分かってなかったのか。人がトイレに行ってる間に、変なものを注文するな。ん？ スプーンが見当たらない。どうやって食べるのだろうか。

「スプーンですか？ この、ハートの横に収納されてるやつですよ」

杏はそう言っ、ハート形のオブジェからスプーンを取り出した。おお、武器みたいだな。ちよつと待て、スプーンが1つしかないのだが。

「癪（しゃく）だわ。先輩がここまで計算していたなんて……。ほら、あ、あーん……してくださいよ」

杏は顔を赤らめて、震える手で俺にアイスの乗ったスプーンを差し出してきた。なにお前、俺に弱みでも握られてるのか？ そんなに嫌なら、辞めればいいだろう。

「いいんです先輩。私のこと好きすぎて変な行動を起こす前に、こっやつて発散させないと」

杏にとつて俺は、頭のおかしいやつらしい。仕方ない。ここは素直に食べよう。そうして俺は、杏の差し出したスプーンに口を付けた。うん、味は悪くない。

「じゃあ……今度は私です。……あーん」

餌を待つ雛鳥のように、口を開けて待っている。そうか、逆もやるのか。もう嫌だ。帰りたい。1つのスプーンで、パフェを完食する。なんだか酷く疲れた。どうして杏は平気なのだろうか。これ以上は限界だった。

解散し、家に帰るとすぐに眠った。今日は本当に疲れた。もうあのようなおぞましいパフエは見たくないものだ。そう考えながら眠ったせいかな、その日見た夢にはハート型のオブジェが出てきたのだった。

◇ ◆ ◇

私の名前は安藤杏。趣味はファッション誌を見ること。自分の服にこだわりはないけど、目だけは肥えているから変な服は選ばない。そのせいで周りからオシャレだとか言われてる。都会に住んでる人に、笑われそうだな。

私は今、高校1年生。入学式の日、変な男に出会った。背は高く、髪には一方向に流れるパーマがかかっている。あと前髪をいじる癖がある。軟派な男だ。どうせ1年の教室の前に居たのも、新入生の女子を引つ掛けるためだろう。こういうやつが、私は一番嫌いだ。

その時私は、購入したばかりの教科書をロッカーに運んでいた。すると一番上の1冊がずれた。それを直そうとしたら、全て滑り落ちてしまった。教科書を拾っていると、一緒に落としたボールペンを巻き髪先の先輩が拾った。最悪だ。でも、お礼は言わないと。軽く頭を下げて、お礼だけ言い早足で立ち去った。

その日以来、先輩は私につきまとうようになった。学校のどこに居ても偶然を装って出現する。こんな陰湿な男は初めてだ。面倒なことになる前に、はつきりお断りしてやった。その時彼は、言い訳もせず素直に謝った。かなりねちっこい性格だと思っていたから、正直意外だった。そういえば、私はこの先輩のことをなにも知らない。別に彼のことを知りたいとかじゃなくて、単なる興味本位で彼のことを調べてみた。中学時代の部活の先輩が、彼と同じクラスだったので聞いてみた。先輩の名前は作田吉利。いつも教室の隅で本を読んでいた、交友関係も狭い。女性と話すことなんてほとんどないらしい。てつきり遊び人かと思っていた。

次の日、また作田先輩と鉢合わせた。さすがにこれは偶然だろう。あれだけ酷く断ったのだから、先輩だって反省したはずだ。そう思ったが、先輩はむしろ以前よりもフレンドリーに挨拶してきた。なんな

んだこの人は。女子とはほとんど話さないんじゃないのか。私は特別なのだろうか。だとすると、女性慣れしていない先輩は、振られても健気に話しかけてきたことになる。どんだけ私のことが好きなんだ！

あまり邪険にするのもかわいそうだと思い、簡単な返事だけはするようにした。

その日から、先輩と色々な話をするようになった。そしたら先輩のことが少し分かってきた。オシャレでやっているのかと思つた。パーマは、天然のものだった。こんなに綺麗に一方向に流れた天然パーマなんて、初めて見た。でも本人は気にしているらしい。ストレートパーマをかければいいと提案したが、そんなことをしたら余計に目立つと言われた。先輩は目立つのが嫌いだ。女性の好みも、目立たない人がいいそうだ。私は目立たないというほどではないけど、友好関係は狭いので、その点当てはまったのだろう。

先輩と出会って結構経つた。なんだかんだ仲良くなって、彼のことも大方理解した。案外、悪いやつじゃないのかもと思つてきた。なんか……そんな私のが好きなら、付き合つてやってもいいかなつて。でも先輩の私に対する好き好きアピールが日々強くなつていてちよつと面白いから、もう少し放つておこうかな。

## 第四話 フアンなんだ

俺は作田吉利（さくた よしとし）。平和を愛する高校2年生だ。なぜ、俺が平穩でなにもない生活を求めているのか。少し話が逸れるが、タナトスというのを知っているだろうか。人が無意識に感じる、死への欲求だそう。それが強い人は、自殺などをしてしまうのかもしれない。ちなみにその対義語がエロスという、生への欲求である。生きたいという欲求で、こちらのほうがしつくりくる人が多いかもしれない。目立たず平和に暮らすことへの欲求。俺はそれをピースと呼んでいる。エロスやタナトスと同様、俺にはこのピースが生まれながらにして存在しているのだ。

対義語というと、正義と悪なんて分かり易いものがある。どちらに偏っても目立つ存在になるので、俺は常に中立の立場を保っていきたい。隣のクラスに西崎春子（にしぎき はるこ）と言う女子がいる。彼女はテレビで見るアイドルなんかよりもずっと可愛らしく、学校で唯一無二の人気を誇っている。入学当時は、彼女に無理矢理言い寄る迷惑な男たちがいた。それを悪とすると、正義というものが確立されていなかった。そこで生まれたのが西崎春子のファンクラブ、笑（えみ）ちゃんファンクラブである。

この組織は西崎春子に言い寄る者に対し、数で圧倒し成敗する。ここに所属するのが、西崎春子のことが好きな連中だ。春子に男を近づけまいとするが、それは自分らにも当てはまる。なんだか歪な組織だ。俺には全く関係のなさそうなこの組織、そこで定められたとあるルールが俺に希望を見出した。



高校生活もルーティンワークと化し、ただ学校に通うだけの毎日。幸運なことにクラス替えでは、春子と同じクラスにはならなかった。春子はシヨックを受けていたが、同じクラスになっていたら俺はシヨックどころか不登校になりかねない。

今日も喫茶店・六連星（すばる）でアルバイト。マスターは、機械からコーヒーが抽出されるのをじっと監視している。あれになんの

意味があるのだろうか。そういえば1年近く働いたが、未だにこのコーヒーがなぜ美味しいのかという疑問を解消出来ていない。ぼんやりと食器を片付けていると、春子が後ろから抱きついてきた。

「よしとくーん」

出たな。こいつは俺が考え事をしていたり、忙しそうにしているとちよつかいをかけてくる。特に電話をしている時が酷い。営業妨害で訴えてやる。

あの告白から、春子の素行はそれはもう酷いものになっていた。毎日のように浴びせられる「好き」という言葉に、俺の精神は疲弊している。お前とは付き合えないと伝えても「だってよしと君、彼女いないじゃん」と良くわからない理論を展開してくる。

今日だってそうだ。迫ってくる春子を両手で押しのけながら、お断りをするが引く気配はない。親しい関係を先に築いてしまったがために、遠慮というものがないのだ。学校ではすれ違うたびに、さりげなく手を触れたりしてくる。もうここまでくると、校内で突然話し掛けてきそうだ。そんなことをすれば他の生徒からの注目は避けられない。

「あ、そうだ、よしと君のクラスも数学の宿題出たよね。バイト終わったら一緒にやらない？」

そんなのあったな。春子の部屋で宿題をやることは結構ある。喫茶店が家と繋がっているし、放課後そのまま働いているので教科書なども持っている。お互い勉強は出来るほうなので、教え合うことにメリットはある。

「やった。じゃあ後で部屋来てね」

そういえば春子の部屋には何度もお邪魔している。前まで女子の部屋に入るなんて考えもしなかったが、世の中なにが起るかわからない。

マスターから夕食をご馳走になった後、春子の部屋で勉強を始めた。床に置かれた折りたたみ式のローテーブル。そこに向かい合って座り勉強をする。しかしあれだ、集中出来ない。

「んー？ どうしたのー、よしと君」

春子は両肘を机の上に乗せ、頬に手を当てて笑っている。なぜこいつは、緩めのシャツを着ているんだ。絶対にわざとだろう。彼女が屈むたびに、下着が見えそうになる。黒いブラジャーが少しだけ見え隠れするのだ。

「男の子つてあんまり知らないみたいだけど、胸元とか見てるとわかっちゃうよ。視線が明らかに不自然だもん」

そうだったのか。露出した部分をつい目で追ってしまいが、あれはバレていたのか。それもそうか。一点を凝視すれば誰だつて気付く。

「これね。昨日買ったんだ」

春子は照れたような素振りで、首元を下げる。見せるな。

「よしと君さ、黒い下着の紐とか出ると、それを目で追ってる時あるよね。だから思い切つてこういうの買つてみたんだ。どうかね」

だから見せるな。黒い色の下着などは、女性の白い肌にギャップをもたらす。それが非常に気になってしまふのだ。そういう性癖なのだから仕方がない。

「こそこそ見るくらいだったら、見たいって言つてね。そしたら……見せてあげるから」

ああ、恥ずかしいなら言わなければ良いのに。春子の顔は、みるみる赤く茹で上がる。かくいう俺もその状態だ。どうするんだこの空気。俺だつて思春期の男子高校生だ。春子のような可愛い女子から、こんなことを言われると動揺する。だが人間には理性というものがあるのだ。ここは堪えて、勉強に集中しよう。

「そつか……じゃあ勉強……しようか」

春子なりに勇気を出した行動だったのだろう。彼女は涙目になつてシャツを直した。下を向いて落ち込んでいる。そんな仕草をされると、無性に愛おしくなつてしまうのが男の性というものだ。気づけば俺の手は春子の胸元へとゆっくり伸びていた。その瞬間、顔を上げた春子と目が合った。急いで手を引っ込めたが、春子の顔には笑顔が戻ってきてしまつていた。

「今なにかしようとしてたけど、やめちゃうの？」

よし。お前は何も見ていない。学生の本分は勉強だ。不純なことなどあつてはならない。再び勉強を再開するも、相変わらずシャツの間から見える黒いものが気になった。それでも理性を保ちながら、なんとか宿題を終わらせた。こんな日々を送っているのは、俺の身が持たない。早急になんとかしなければならぬ。

春子からの愛の告白は、最初の頃は可愛いものだった。ただ甘えていただけという感じだったので、スルーしても問題なかった。だが最近目は真剣だ。挙句の果てには色仕掛けまで取り入れてきている。そろそろ押し切れられそうだ。何か対策を講じなければならぬ。

「おい、よしと、やべーぞ」

藪から棒にどうした平社員。こいつはなんでも誇張する癖があるから、きつと大したことない情報に違いない。

「いやマジでやべーんだよ！ 笑ちゃんファンクラブって知ってるだろ？」

よし分かった。俺はその話題には興味がないから、昨日見たグラビア番組の話をしてくれ。それを子守唄にして眠るとしよう。

「そのファンクラブは、笑ちゃんへの過度な接触や告白を禁止にしたらしい。抜け駆け禁止条例って言うらしいんだが……」

春子もその領域まで来たか。もはやファンクラブというより親衛隊だ。そんなに春子のが好きなら、告白なりなんなりすればいいだろう。自分まで束縛してどうする。だがこれで春子に近づきたいだけの会員は一掃される訳だ。

「ちくしょう！ あんなファンクラブ辞めてやる！」

お前も一掃される側かよ。……ん？ 待て。そのファンクラブは、誰でも入れるのだろうか。

「ああ、週に一度の活動に参加出来るやつなら、誰でも入れるぜ。基本的な活動は、笑ちゃんに害がありそうなやつを、人員を集結させて制圧することだ」

ほう、頼もしいじゃないか。

「ああそういえば、入会するには一つ必要な物があった。笑ちゃんの



写真が必要だ」

それは盗撮なのではないだろうか。まずそこから取り締まるべきだろう。まあいい、そのファンクラブに俺も入会させてもらおう。

「おおー、お前、興味ないふりしてた癖に、笑ちゃんのファンだったんだな」

ああそうだ。大ファンなんだ。ぜひ入会したい。そして抜け駆け禁止条例をさっさと俺に適用させろ。ついに勝った。俺の平穩は守られるのだ！

しかし盗撮と言うのも気が引ける。春子だって大事な友人だ。彼女が嫌がることはしたくない。仕方ない。彼女に直接写真を送ってもらおう。スマホを手に取り、春子にメッセージを送った。数分後、自撮り写真が送られてきた。斜め上から撮った写真で、指が引っ掛けられたシャツの隙間から、胸元が見えていた。ほう、思ったよりでない。……これは使えない。仕方ないから盗撮しよう。

放課後、平社員の案内で、笑ちゃんファンクラブに訪問した。まさか部室まであるとは……。笑ちゃんファンクラブという名前で、部としての申請が通っているらしい。男子から絶大な人気を持つ春子への対応は、教師陣も手を焼いていた。そこで彼女を守る部を正式に許可したそうだ。

白い引き戸を開け、中に入る。部室はそれなりに広く、数人の幹部が座っていた。パソコンなども置かれている。まるで生徒会室のようなその場所に、生徒会長のような、メガネの男が立っていた。

「ふむ、君が作田君だね。歓迎するよ」

メガネは、俺の方に来ると握手を求めた。平社員が話を通してくれたので、自己紹介をする必要はない。ちなみに、このメガネは佐田源太郎（さだ げんたろう）。ファンクラブでは、会長と呼ばれている。「君、笑ちゃんのことを好きかね？」

頭を空にして肯定する。つい敬語で返事をしてしまったが、会長は同級生だ。

「では笑ちゃんの好物は知っているかね？」

確かホットケーキミックスで作ったドーナツだった気がする。

「不正解だ。正解は柑橘類だ」

そう言つて、勝ち誇つた表情を浮かべる会長。だがそれこそ不正解だ。春子は柑橘類が好きというわけではない。母方の親戚が山形に住んでいて、やたらと柑橘類を送つてくるそうだ。それを仕方なく学校で消費しているだけだと、本人が言つていた。

「なんだと？ たしかに山形に親戚がいるという情報はあるし、筋は通っているな。貴様は何者だ」

しまった。春子は男子と深い関わりを持たない。この空間で、春子について一番詳しいのは俺だった。ここは、ただの推測ということにしておこう。

「そうか。親戚から憶測を立てるとは、なかなか面白いじゃあないか、君は」

会長は愉快そうに俺の肩を叩く。その後は、この組織について詳しく教えてくれた。このメガネ、話はうまいしこれだけの人数を集めただけあつて、なかなかの才覚を感じる。だがなぜそのカリスマを、こんな形で発揮してしまったのかは学園七不思議なんかよりもよっぽど怪奇である。

ともあれ俺はこの日、笑ちゃんファンクラブの一員となった。

バイトが終わり一息つく。春子は俺にカフェオレを用意してくれていた。帰る前に出されるこのドリンクは、福利厚生としてはなかなか良いものだ。カウンターの向こうでは、春子が布フィルターにお湯をゆつくり注いでいる。

「よしと君、私のファンクラブに入ったんだって？ なんてー？ 私のファンだったの？」

背を向けて話す春子の声は、少し嬉しそうだ。凄いな、もう知っているのか。とりあえず、春子の大ファンだったと適当な嘘でもついておく。これからはファンクラブの一員として君を守っていくよ。

「えー、守ってくれるのは嬉しいけど……それならファンクラブに入らなくてもいいじゃん。私はよしと君だけに守ってほしいな」

カフェオレを持ってきた春子が隣に座り、俺の顔を覗き込んだ。春子を守るために、ファンクラブに入ったのではない。俺自身を春子の告白から守るためだ。

「そうだ、私のファンなら握手してあげる」

アイドルの握手会みたいに、他の連中だったらさぞ喜ぶだろう。春子は俺の右手を両手で包み込んだ。そうして指を絡めたり、頬ずりしたりとしばらく触っている。アイドルの握手会は、こんなになつたりやらない。

「よしと君の手ってなんかおつきいね……。私の手よりちよつと硬いかも」

春子のなめらかな指が、舐めるように俺の指の股を這う。なにが楽しくてこんなことをするのだろうか。そう思ったが、不思議な感覚が込み上げてきた。ただ手を触られているだけなのに、気持ちが高ぶる。

「ねえねえ、よしと君、私のファンってことは、私のこと好きなんですよ?」

囁くように話す春子の吐息が、俺の手の甲を撫でる。これはまずい。場の雰囲気というのだろうか、非常にまずい。仕方ない。早速、切り札を切らせてもらおう。笑ちゃんファンクラブの抜け駆け禁止条例という切り札をな。

「え……? ぬ、抜け駆け禁止条例? なにそれ! ちよつとなんで帰るの!？」

後ろで色々言っている春子を振り切り、さつさと帰る。素晴らし。これがファンクラブという組織の力か。今後春子がなにを言うてしようと、これで収めることが出来る。半年近く春子からの告白をかわしていた。そして日に日に、振り切るのが難しくなっていた。だがようやく、解決の糸口を見つけた。

次の日、放課後のアルバイト。客の少ない時間帯に帰宅したばかりの春子が学生服のまま、裏口のドアの前から笑顔で手招きをしていた。

「よしと君、ちよつといい？」

目が笑っていないように見える。春子の元へ行くと、シャツを掴まれ体を壁に押し付けられた。結構力あるんだなこいつ。

「ねえ、フアンクラブ辞めてくれない？」

早速、抜け駆け禁止条例について調べたようだ。女子の情報網は半端じゃない。だが俺はフアンクラブを辞める気など毛頭ない。会長だって良い人だし、入会してすぐに辞めるなんて無礼だ。

「辞めて」

春子の表情は真剣そのもので、なにか言わなければ解放してくれそうにない。仕事なんだが……。

「抜け駆け禁止条例なんて意味ないから。付き合ったり、過度な接触を禁止するっていうなら、もう過度な接触の部分は破ってるよ。だったら、もう一つも破っていいよね」

いや付き合う気はないから。なんてことは前から伝えているし、それを言っても引き下がらないことも知っている。だから今回は方向性を変えて、フアンクラブに入ってからまで春子を守りたいのだと主張してみた。

「だったら直接守ってよ！ ずっと側に居てよお！」

俺のエプロンにしがみつきの、涙目でそう叫ぶ春子。流石に声のボリュームが大きくなってきたので、春子の口を右手で強引に抑えた。半年近く春子からの告白をかわしているが、流石に限界が来ているのかもしれない。とにかく今は仕事だ。それを口実にフロアに戻った。春子はしばらく俺をじつと見ていたが、いずれ自分の部屋に戻って行った。

その日は、放課後にフアンクラブの活動があつた。平社員と入れ替わりで入った新人の俺に、会長は丁寧に活動内容を教えてくれた。

「まあ、口で言っても分からないだろう。付いて来たまえ」

会長直々に教えてくれるらしい。会員は結構いるみたいだが、皆それぞれ担当があり、曜日ごとにローテーションをしている。

向かったのは2階と3階を繋ぐ階段の踊り場。ここからは、春子の

教室が見える。彼女が廊下から出ると、専用のスマホアプリで位置を皆に知らせる。ちよつと待て、なんだこの校内地図アプリは。

「GPSなんて使ったらストーカーになってしまうからな。このアプリを使って、目撃情報を元に位置を特定するんだ。笑ちゃんが人の少ない場所や、危険な場所に行った時に、いつでも出動出来るようにね」それは十分ストーカーだろう。会長はメガネのフレームを指で押さえながら、スマホ画面を楽しそうに見ている。春子の位置が知れるだけで、こいつは充実出来るようだ。

そんな感じで、ファンクラブ新人研修を終えた。春子への警備体制は完璧で、春子と付き合うなど俄然無理なのだと言確認させられた。ファンクラブ全員を敵に回すなど愚の骨頂。そしてなにより、この会長は良いやつなのだ。とても裏切れない。堅物な外見だが、思考が他人と一風違う。それでいて高い知性を感じた。話せば話すほど面白い人物だった。

「今日は付き合ってもらったからな。少しだけ褒美をやろう」

スマホ画面を俺に見せる会長。画面にあるのは、先ほどのアプリだ。一体これのなにが褒美なのだろうか。ああそうか。この廊下を、春子が今から通るのか。笑ちゃんファンクラブ会員へのご褒美とは、笑ちゃんを一眼見ることだった。廊下の向こうから、女子3人組がやって来る。その中心には春子が居た。左右の女子も、結構な容姿をしている。可愛い女子は、可愛い女子とつるむものと。会長を見ると、緊張で表情筋が固まりモアイのようになっていた。あとメガネが曇り始めたのは、どういう原理なのだろうか。

そして3人の女子は俺たちとすれ違った。正直俺も緊張した。学校では話し掛けるなど言っているが、今の春子はなにをしでかすか分からない。だが何事もなくすれ違った。安堵した瞬間、春子が俺の方をぐるりと向いた。俺は無意識に呼吸を止めた。心の中で、何も起きないことを願う。願いが通じたのか、春子は再び友人と歩き出した。心臓に悪い。すれ違ったあと、後ろから彼女たちの声がかすかに聞こえた。

「あれ作田君でしょ？ 話しかけなくてよかったの？」

「いいから」

「えー、なんでー。話せばいいじゃん」

いや気のせいだ。気のせいに違いない。会長に聞かれていないか  
と思い、様子を見ると「美しい……」と言って天を仰いでいた。さつ  
きの話は聞こえていないようだ。

事件は前触れもなく起きた。俺が笑ちゃんフアンクラブの新人研  
修を受けた数日後、フアンクラブが解散したのだ。元部室の前には多  
くの生徒が集まり、何事かと騒いでいる。元部室を閉ざし片付けをし  
ている幹部たち。彼らはその日、解散の理由を皆に伝えることはな  
かった。

休日を挟むとほとぼりも冷め、フアンクラブ解散の理由を求める者  
は少なくなった。だが俺は未だに納得していない。抜け駆け禁止条  
例は、俺にとつて必要なものだった。行き場を失った、春子を遠ざけ  
る理由。それが亡霊のように思考の中をさまよう。そんな迷える俺  
を導くように、笑ちゃんフアンクラブ元会長・佐田源太郎から呼び出  
しを受けた。

放課後、プールへ続く渡り廊下。元会長は、グラウンドを走る野球  
部をメガネ越しで眺めながら俺を待っていた。

「久しぶりだな」

彼の様子に変わりはない。むしろ上機嫌に見える。そんな彼を見  
ると、なぜフアンクラブを解散させたのかますます分からなくなっ  
た。

「ああ、それを話そうと思ってね。実は笑ちゃん本人が部室を訪ねて  
来たんだ……」

本人つてなんだ。マネージャーでもいるのか。彼にツツコミを入  
れても話が進まない。最後まで聞こう。

「笑ちゃんから直接、このクラブから君を解放して欲しいと言われた  
のだ。君と笑ちゃんがどういう仲なのかも聞いた……」

そうか。それは申し訳ないことをしてしまった。だが安心して欲

しい。俺にその気はないのだ。それに、尚更フアンクラブは必要だ。フアンクラブは俺みたいな人間を春子から遠ざけるためにあるはずだ。

「違うのだよ。このフアンクラブを作った理由は、彼女が誰かに取られるとか、そういうものではないのだ。君にだけは話しておこう。私がフアンクラブを結成した理由を」

彼は校庭を眺めたまま、笑ちゃんフアンクラブ結成秘話を話した。その時の彼は、優しい表情をしていた。

笑ちゃんフアンクラブ元会長こと佐田源太郎は、春子と同じ中学出身だった。その頃から春子のファンで、ずっと彼女のことを見ていた。中でも春子の笑顔が好きで、それを失わないために幸せになって欲しいと願った。高校に入ると、彼女は男性に対し恐怖を抱くようになっていた。それは些細な変化で、ほんの一握りの彼女の知り合いだけが知っていた。だが佐田源太郎はそれに気付いた。春子の内面的な部分に惹かれ、ずっと見ていた彼女だからこそだった。そうして春子を、彼女に強引にせまる男子たちから守れる組織を作ったのだ。

「フアンクラブは彼女を幸せにするために作った。彼女を守るためにね。だがその必要はなくなった。もう彼女には君がいる」

待て待て、今まで大人数でやっていた業務を一人に押し付けるな。それに俺は自分勝手な人間だ。彼女の幸せを望むなら、他に適任がいるだろう。

「会って日は浅いが、君が相手なら安心出来る。それに男を警戒していた笑ちゃんが自分で選んだ相手なら、それこそ問題ないだろう」

あんたの目は節穴か、もしくはメガネに度が入ってないのか。俺みたいな普通の男、彼女の隣に居たらおかしいだろう。俺は平和な学校生活を送りたいのだ。浮きたくないんだよ。

「ははっ、笑ちゃんが一般男性を選ぶとはな」

いや春子だって一般女性だからな。なに笑っているんだ。笑い事じゃないだろう。

「最後に一つだけ教えてくれないか？ 最初に出会った時、私は君に笑ちゃんの好物を聞いた。そして君はドーナツだと答えた。その根

扱はなんだ」

単純に本人から聞いただけだ。あと正確にはホットケーキミックスで作ったドーナツだ。春子の母が生きていた頃、それをよく作ってくれたらしい。手作りのドーナツは、一度作ると大量に出来てしまう。3人で暮らしていたからこそ、消費できた。だからこそ家族の思い出の味として、彼女の中に強い印象を残している。そういえばこの前、春子がそれを作ってくれた。俺が居る時は消費出来ると考えたのだろう。

「そうか。それを聞いて安心したよ。……じゃあな」

元会長はそれだけ言い、背を向けて校舎側へと歩き去った。何一つ解決していない。この話は一体なんだったのだろうか。彼が立ち去る前に見せた笑顔。その完璧な笑顔は、流星は笑ちゃんファンクラブ元会長といったところだった。

ファンクラブが消えたことなど露知らず、春子はいつものように微笑んでいる。喫茶店に来る男性客の多くは彼女が目的だ。春子に名刺を渡そうとする客もいるが、それはマスターや俺が阻止している。そんな明るくて、誰の心にも隙を作る彼女が、俺の元へとやってくる。ふわりと動く髪や、エプロン。柔らかい目元に、小ぶりな唇。その全てが笑っているような、そんな彼女が俺に言うのだ。

「よしと君、好きだよ。だからね、ファンクラブに入るとか、次にまた変なことしたら容赦しないから」

俺はどうしたら良い。彼女を止めるものがない今、どうやって平穏を保てば良いのだろうか。



## 第五話 わかった、付き合おう

俺は作田吉利（さくた よしとし）。目標は生涯平凡であること。そんな人も居たねとすらも思われない、印象のない人生を送りたいのだ。どんな目標でも、達成には多くの障害がある。そこで重要になるのが、どう決断していくかだ。人間は1日に数多くの決断をする。重要なものもあれば、今日のご飯はなにしようなどという些細なものもある。かのス○イーブ・ジョブズ氏が毎日同じ服を着ていたのは、この決断を減らすためだったという。服を選ぶ決断を節約して、他に費やしたわけだ。それほど、人生において決断は重要だ。かくいう俺も決断を効率化させるために、やっっていることがある。それは、なにか決断を迫られた場合、『普通の人ならどうするか』という思考に持っていくことだ。これにより俺の人生は平均へと導かれ、特徴のない普通の人間になる。この方法で多くの困難を乗り越え、他人からの注目を避けてきた。

隣のクラスに、西崎春子（にしぎき はるこ）と言う女子生徒がいる。彼女の笑顔は多くの人を魅了し、誰からも愛される柔らかい性格を持っている。そんな彼女がどうして俺を好きになったのかは、フィボナッチ数列を見出した人物にも証明出来ないだろう。春子のような特別な人間が俺に突きつける選択肢は、『普通の人ならどうするか』という思考を狭めていく。そうして絞り込まれた決断は、遂に一つへと収束される。



昼休み、俺の前で平社員とデブが話している。いつもの光景だ。

「この前さ、黄色いバッグ・クロージャーがあつてさ」

「マジ？ 黄色はレアだよ。凄いね平社員」

待て、バッグ・クロージャーとはなんだ。流行ってるのか？ その話、俺も混ぜろ。

「まあ、色違ってても性能変わらないけどな」

「実はね俺、外国版入手したんだよ」

「まじかよすげー！ 海外版とか集めたいよなー」

だからバッグ・クロージャーとはなんなんだ。気になるだろう。教えてろ平社員。

「お前、バッグ・クロージャー知らないのかよ！ あれだよ、食パンの袋ふさぐやつ」

あれか！ あの四角くて平たいやつバッグ・クロージャーって言うのか！ 食パンとかについてくる、封を閉じるやつだな。ゴミじゃないか。あれのどこに、お前らを引きつけるものがあつたんだ。

「ところでさ」

どうした平社員。

「おっぱいっていいよな……」

は？ 話変わりすぎだろ。『ところで』という言葉は、会話を根こそぎひっくり返せるほど便利ではないはずだ。バッグ・クロージャーの話に戻せ。

「いや、昨日AV見てたらさ。おっぱい最高だなんて思って」

語りだした。そもそもこいつは日常的にAVを見ているのだから、いつも感じていることだろう。

「わかるよ平社員。俺もおっぱいってどんな触り心地なのかなって気になるし」

なんだデブ、お前立派なおっぱい持つてるじゃないか。それを揉んでおけよ。話題がおっぱいにシフトしたが、とても付いて行けそうにない。散れ、俺は読書に勤しむ。

「いやー、爆乳もいいけどやっぱ適乳かな。笑（えみ）ちゃんとか大きさ完璧だよな。笑ちちゃんのおっぱい触りてー」

平社員が女子から嫌われる原因は、堂々と実名を出すところにもある。あと春子のは、強調する下着を着けていないだけで実際は結構でかい。まあ、なんというか……俺は平社員のごときは結構好きだし、友人だと思ってる。だが今回ばかりは、かばいきれそうにない。他人のふりをしよう。

「なんの話してるのー？ 平井くん」

横から聞こえたのは春子の声。人脈の多い彼女は、当然このクラスにも友人はいる。昼休みということで遊びに来ていたのだ。それに

しても平社員は、平井という苗字だったのか。

「私のおっぱいがどうとかって言ってたよね」

「え、いや、その……」

完全に聞かれていたようだ。終わったな平社員。

「最低だね」

そう言つて春子は、からかうような笑顔で振り返った後、その場を去つて行った。良かったな平社員。そこまで気にしていないみたいだぞ。まあ、こいつにそれを分かるほど、春子を理解しているかは別の話だが。……そうか。もう、平社員には俺の声すら聞こえてないのか。真つ白に燃え尽きた平社員の隣では、デブが何かをばりぼりと食べている。周りの女子たちがひそひそと、平社員に対して陰口を叩いている。なるほど、いつも通りの昼休みだな。

平社員が深く傷ついたその日、春子は喫茶店・六連星（すばる）の手伝いには来なかった。彼女だつて暇ではないので、いつもここで手伝いをしているわけではない。バイトが終わりスマホを確認すると、春子からメッセージが来ていた。内容は給料を支払うので、終わったら待っていて欲しいとのこと。今日は給料日だったのか。マスターはなにかと忙しいので、給料は春子から渡される。ちなみに、ここは現金払いである。給料が全て生活費に消える俺にとっては、銀行に行く手間がないのでこちらの方が楽だ。

カウンター席は背もたれが低いので、テーブル席で読書をして待つ。椅子を横に向けると、テーブルが丁度良い肘掛になる。少しすると店とリビングを繋ぐドアが開き、春子が出て来た。彼女の手には茶色い長3封筒があった。いつもの給料袋だ。

「はい、これ今月分」

封筒を受け取る。そしてなぜか、春子は俺の膝に座った。尻が俺のアレを圧迫している。これは良くない。一人暮らして人の温もりに飢えている上、思春期である男子高校生には刺激が強すぎる。……間近にある春子の髪の毛は、とても良い匂いがした。風呂に入ってから来たのだろうか。

「昼休みに私の話、してたでしょ」

あれは平社員が勝手にしていただけだ。俺は関係ない。そんな俺の言い訳など聞かず、春子は話を続ける。

「胸触りたいんだったら……いいよ、触って」

シャツの裾を出し、手を入れる空間を作る。正直触りたい。春子は俺にとって、理想の女性とは言えない。目立つし、外見も整っていて色々釣り合わない。だが性欲は別だ。可愛らしい見た目をしているから、普通に欲情してしまうのだ。いいじゃないか。本人が良いと言うのだから。……いや待て、いつときの感情に流されてはいけない。

「よしと君なら……いいよ」

春子は手を後ろに回し、ブラジャーのホックを外した。その行動が原因かもしれない。はたまた彼女の体重が俺の股間を圧迫しているからかもしれないし、彼女から良い匂いがしたのがいけなかったのかもしれない。とにかくその瞬間、理性がどこかへ吹き飛んだ。

シャツに両手を滑り込ませ、まつすぐ胸へと進む。その先にあつたのは、とてつもなく柔らかくて弾力のある何かだった。なんだこれは……！ この感触について詳しく説明したいところだが、興奮のあまり思考が回らない。人生で味わったことのない、感触による快樂。

「ん……んん……」

春子は声を出さないように必死に耐えている。そんな喘ぎ声をもっと聞きたいと思いついつい強く揉んでしまった。

「あつ……ん……」

やばい。これは止まらない。もうどれくらいこうしていただろうか。気づけば春子は体をずらし、俺の方を向いて顔を近づけていた。とろけそうなほど緩んだ表情で、キスを求めてくる。可愛い。だが顔を見てしまうと、どうしても見えてくるものがある。それは目の前に居るのが春子だという事実だ。

現実に戻されたと同時に、激しい後悔が襲ってきた。なんてことをしてしまったのだろうか。俺は立ち上がる。膝に乗っていた春子は、突然放り出される形となり動揺していた。

まさかこうも簡単に理性が飛ぶとは思っていなかった。日々繰り返される春子からの求愛が、ジャブのように雄の本能に効いていたのかもしれない。ひたすらに謝って、それでも足りない気がして給料の入った封筒を彼女に押し付けた。

そして逃げたのだ。喫茶店・六連星から飛び出し、日の落ちた薄暗い街道を走った。最低なことをしてしまった。春子を受け入れる気なんてなくせに、自分の本能に従ってしまった。そしてあまつさえ、金で解決しようとした。春子は金のためにあんなことをするような女ではない。もう何も考えたくない。とにかく明日、謝ろう。許してもらえないかもしれないし、もう友人ではいられないかもしれない。だが俺には謝る以外に、なにも思いつかなかった。

翌日の昼休み、平社員、デブと共に昼食を食べていた。昨日の件があり、心が重い。陽気に話す平社員の話は頭に入ってこないし、その隣で繰り広げられるデブトークには興味が持てない。これはいつものことか。それにどんな味だったかと久しぶりに買ってみた栄養食品も、味がよく分からない。砂漠の砂を固めたような食感に、少しでも呼吸をしようものなら粉を吸い込み噎せてしまう。とても喉を通りそうにない。いや待てよ、これカ○リーメイトか。これも、もともとこんな味なのではなからうか。

平社員が言うには、春子の元気がないのだと噂になっているらしい。これは腹をくくって、さっさと謝った方が良い。そう考えていると突然、教室のドアが開け放たれた。大きな音を立てたドアの方向に、クラス全員が箸を止めて注目する。そして皆驚愕した。皆の視線の先に居たのは笑ちゃんこと、西崎春子だったからだ。彼女の表情には、代名詞とも言える笑顔はない。そして春子は、真っ直ぐ俺を見ていた。

まずい。これはまずい。心臓が激しく鼓動する。俺の中のピースが警鐘を鳴らしているのだ。

歩み寄る春子の右手には、茶色い封筒がある。昨日俺が押し付けた給料袋だ。確かに謝ろうとは思っていたが、これほど注目を浴びた状

態というのは良くない。立ち上がり、場所を移そうとしたが遅かった。

「こんな物のために……私は……あんなことをしたんじゃないツ!!」  
思い切り封筒を投げつけられた。封筒は俺の胸に当たるとそのまま地面に落ちた。中身がはみ出なかったため、何が入っていたのかわかる者は春子と俺だけだった。

春子の剣幕に黙る者も居れば、ひそひそと憶測を話している者も居る。兎にも角にも、注目が一点に集中していた。

「ねえ……よしと君、付き合つてよ。あそこまでしたんだから……付き合つてよお……!」

春子は俺のシャツを掴み、すぎるように訴えかける。終わった。俺はどこで間違えたのだろうか。分かっている。理性をコントロール出来なかった俺が悪いのだ。いつだって平凡な道を選んで来たはずだ。それが今はどうだ。学校で一番人気のある女子から、クラス中が注目する中告白されている。

いや、待て、れれれ冷静になれ。人生最大の危機だからこそ、選択を間違えてはいけない。こういう時こそ原点に帰るべきだ。何か決断を迫られた場合、『普通の人ならどうするか』と考えるようにしている。俺は平凡な男子高校生だ。平凡な男子高校生が、学校一の美少女から告白されたらどうするか。二つ返事で受け入れるに決まっている。今だけを考えれば断るのが良いかもしれないが、長期を見据えればブランドイメージを保つことが最優先だ。よし分かった。春子、俺と付き合おう。

「え……えっ! ほんと? や、やったあ!」

花が咲くように、ぱっと明るくなる春子の表情。勢いで抱きつこうとする彼女の肩を抑え、教室の外に連れ出した。もちろん給料袋を拾ってからだ。静かだった教室は、俺たちが去った途端にどつと騒がしくなった。

春子の腕を引き、階段の踊り場に来た。彼女を壁際に追いやり、片手を壁に当て行動を制限する。勢いでこういう体制になってしまっ

だが、これ壁ドンじゃないか。そんな俺に、春子は顔を赤らめてはにかんでいる。

「よしと君って……付き合うと強引になるタイプなんだ」

違う。それと浮かれているところ悪いが、付き合ってから学校での接触は避けるようにしてくれ。

「ええ……嫌だよ。恋人同士になっただから一緒にいたいし」

口を尖らせて拗ねられても、俺は意見を変えるつもりなんてない。そもそも学校で目立ちたくないのだと、何度も伝えている。もうかなり手遅れだが、悪化は食い止めなければならぬ。

それに、考えなしにただ告白を受けたわけではない。一度恋人になったとしても、それをうやむやにしてしまえば良い。彼女とは極力、学校では会わずいつの間にか別れているのが理想だ。目立たずひっそりと学園生活を終わらせることは出来なかった。だがまだ手遅れではないはずだ。可愛い女子が誰かと付き合うことなどよくあることだ。そしてそのカップルが解散した場合、相手の男のことなど誰が覚えていようか。

「……わかった。じゃあ、せめて放課後は一緒に帰ろうね」

それも駄目だ。春子は全く納得していなかったが、ここは譲れない。あとはどうにかして、別れなければならぬ。いや、元より釣り合っていないのだ。放っておけば勝手に愛想を尽かすだろう。世の中には良い男などいくらでも居るのだから。

その後しばらくして、笑ちゃんファンクラブ元会長こと佐田源太郎（さだ げんたろう）から俺のスマホにメッセージが届いた。

『おめでとう』

うるさい。しかしそのメッセージが意味するところは、もう他のクラスまで噂が回っているということだった。なんとも頭が痛くなる状況だ。

西崎春子に彼氏が出来たらしい。そんなスキャンダルで、学校は大いに盛り上がっていた。いや、多くの男子にとっては盛り下がっていたというべきか。どこに居ても、春子と付き合うこととなった経緯を

聞かれる。それは教室でも同じだ。目立たず平和な学校生活はどこへやら。

今更なにか行動を起こしたところで、事態が収集するとも思えないのでさっさと帰宅してしまおう。最後の授業が終わるとホームルームをサボり教室を出た。下駄箱に向かう途中、一つ下の後輩である安藤杏（あんどう あん）と遭遇した。2年のロッカーの前に立っているとすることは、誰かを待っているのかもしれない。

だが今は、彼女に構っている余裕はない。俺は軽く挨拶をすると、彼女の脇を通り過ぎようとした。だが右手が捕まれ、俺の体は振り子のように跳ね返った。なんだ、何か用があるのか。俺は忙しいんだ。「先輩、ちよつと来てください」

いつもの彼女とは違う面持ちだった。重要な話、もしくは悩み事でも抱えているのかもしれない。俺としては早く帰りたいが、先輩として話を聞いてやらなくもない。

杏と俺は、空き教室のロッカー前に来た。なんだか最近、人気の少ない場所にばかり来ている気がする。春子関係の案件が多かったので、仕方がないのかもしれないが。

杏は何かを言おうとはしているが、なかなか話を切り出さない。歯切れが悪そうに、口を閉じたり開けたりしている。しばらくそうした後、突然泣きだした。どうした、なにか嫌なことでもあったのか。とりあえずハンカチを渡す。っておい、ハンカチで鼻をかむな。

「……せ、先輩、ひどいです……。私のこと好きって言ったのに……」

言ってない。

「西崎先輩と付き合うなんて……」

結局その話か……。もう1年まで噂が広がっていたとは驚いた。だがなぜ、杏は泣いているのだろうか。彼女は俺のことを振っている。俺が春子とどうなるかが、関係ないはずだ。しかしよく考えてみると、自分のことが好きだと思っていた相手が、いきなり恋人を作ったらショックを受けるかもしれない。仕方ない。ちよつと協力者が欲しいと思っただけのところだ。杏には事情を話しておこう。



そうして春子と俺の関係を話した。同じ喫茶店で働いていることや、付き合う気はなかったこと。どうにかして別れようと考えていることなど、一通り説明する。話し終わると、杏はほとんど泣き止んでいた。

「もう……西崎先輩にすら心が動かないとか、私のこと好きすぎて怖いですよ……」

それは違う。杏は涙を袖で拭きながら、少し嬉しそうな顔をする。話を聞いたからには、協力してもらおうからな。

「普通に振っちゃえばいいじゃないですか」

駄目だ。味方の多い春子にそんなことをしたら、その数だけ敵を作ることになる。それに春子とは、知らない仲ではない。こつぴどく振って傷付けるのも心が痛む。

「春子春子って……そんなんで、どうするんですか」

なに不機嫌になっているんだこいつは。とにかく春子の方が俺を嫌いになれば問題ない。もしくは自然と疎遠になり、いつのまにか別れている状態が好ましい。

「それ結構難しいですよ。なんか心配なんですけど」

杏は本気で心配そうな表情で見つめてくる。だが問題ない。策はある。それが失敗して、これはもう駄目だと思った時に杏に相談しようと思う。

「それって手遅れだと思うんですけど……まあ、なにかあったら連絡してくださいね。いつでも相談に乗りますよ」

この子は、なんて良い後輩なのだろうか。出会い方は悪かったが、今では可愛くすら思える。それに女子の協力者が出来たのは大きい。俺だけでは女心など分からない。

「あ、そうだ。このハンカチ貰いますね」

洗って返してくれ。それはお気に入りなんだ。

「私の使用済みハンカチを、なにに使うつもりなんですか。先輩の変態っぷりは、彼女が出来ても健在ですね」

使用済みとか言うな。それと俺は変態じゃない。やはり女子というものは、何を考えているのか分からない。

春子の大胆な告白は学校内で大きな衝撃を生み、翌日は寝込んでしまう男子生徒が出るほどだった。それは数日経っても収まらず、廊下を歩くだけで知らないやつから噂される毎日。正直、ストレスで胃に穴が空きそうだ。春子とは今まで通り、学校では接触していない。意外なことに、最も恐れていた、春子のが好きだった男子たちからの嫌がらせは起きていない。思いの外、学校生活は平穏だった。この平穏が保たれている内に、事態を收拾する必要がある。

ぼうつと教室の窓を眺める。隣では平社員がとろろ昆布を食べている。とろろ昆布はすばらしい食品だが、こいつが食べているとどうしてか気色が悪い。

「お前、笑ちやんと一緒に食べなくていいのか？」

問題ない。それよりも平社員は、笑ちやんのが好きだったはずだ。俺にそんなことを聞いてる場合なのだろうか。

「だって相手はお前だろ。流石に他のやつも、諦めがつくんじやないか？」

いや諦めんなよ。今まで繰り広げていた水面下の戦いはなんだったんだ。春子を巡って、汚い足の引つ張り合いをしていただろう。それにこいつは、俺を買い被りすぎている。親戚のおばさんに、イケメンと言われるあれだ。

無意味な抗議を平社員にしていると、誰かが俺の肩を叩いた。クラスの女子だ。名前は知らない。彼女は俺に、ドアの方を見るように言った。目を向けるとそこには春子が居た。

「あ、居た。よしとくーん！」

なぜ春子がここに居る。やめろ、手を振るな。学校で話しかけるなと言ったのに、どういうことだ。急いで春子に近寄り、理由を尋ねた。「だって、よしと君いつも適当なものしか食べてないんだもん。彼女としては心配だよ」

そう言って可愛らしい包みに入った。弁当を差し出す。聞きたいのは、そんなことじゃない。なぜここに来たのかと聞いているのだ。ここでは目立ってしまうので、場所を変える。確かこの時間、花壇付

近は人が少なかつたはずだ。

校庭裏の花壇の前、そこにあるベンチに並んで座る。手作り弁当は、断るのももつたいないので食べることにした。うん、美味しいな。一人暮らしで料理も出来ないので、手作りの食品に飢えている。隣では、俺の顔を眺めながら春子がにこにここと笑っている。

「そんなに必死に食べなくてもいっばいあるよ。でも良かった、喜んでくれて」

しまった。久しぶりのまともな食事に、つい夢中になってしまった。もはや説得力の欠片もないが、今後とも教室に来られると困るので弁当は断ろう。それに春子だって大変だろう。

「別に大変じゃないよ。よしと君、いつも売店で買った栄養のなさそうな食べてるし」

なぜそれを知っている。とにかく弁当は止めてくれ。どうして突然約束を破ったんだ。学校での接触は避けるように言っていたはずだ。

「私たち、付き合ってるんだよね……？ 恋人っぽいこと、全然出来ないよ……」

俺たちは付き合っただけはいるものの、今までと全然変わらない日常を送っていた。それが不満だったのだろう。実を言うと、これは想定内だったりする。理想と現実とのギャップにより解散するカップルは多い。春子が不満を持ち始めたのは大きな前進だ。

「付き合ったら、よしと君になにしてもいいと思っただのに……」

付き合ったからって、なんでも許されるってことはないだろう。恋人を理由に俺が春子にセクハラしたら不快に思うはずだ。

「いいもん別に。私だってセクハラしたいし」

そうか。ならば尚更駄目だ。放っておいたら、なにをされるか分かったものじゃない。

「恋人っぽいこと全部したいの。まだキスだっただけしてないし。ペア룩とかもしたい。あと……学校も一緒に行きたいし、休み時間も一緒にいたいんだもん。いちやつききたい時に、いちやつききたい！」

春子はうつむいて拗ねて見せるが、言っていることはめっちゃくちゃ

だ。その要望を全て実行したら、ただのバカップルになってしまう。バカップルの悪目立ちは、俺でなくても精神的にくるものがある。

空になった弁当箱を春子に返す。この弁当箱一つ洗うのも、結構手間だろう。「あ、よしと君、右のほっぺにご飯粒ついてるよ」

それは気付かなかった。手で右の頬を摩るが、ご飯粒は見つからない。

「もつと上だよ。しょうがないな、私が取ってあげる。顔こっち向けて？」

春子はベンチから乗り出し、拳一つ分ほど腰を上げた。そして彼女の顔が近づいたかと思うと、唇に柔らかいものが触れた。一瞬何が起きたのか理解出来ずにいたが、少しすると状況を理解した。こいつ、どさくさに紛れてキスしやがった。混乱が解けない内に、春子の唇はゆっくりと離れる。

「まずは一つ達成だね。ファーストキスも貰ったし、次はなにしようか」

そう言って、唇に指を当てて微笑んでいる。おい待て、不意打ちは卑怯だろ。俺が問いたただそうとすると、春子はいたずらっぽく笑いながら逃げて行った。

## 第六話 別れよう

俺は作田吉利(さくた よしとし)。俺には今、付き合っている女性がいる。名前は西崎春子(にしざき はるこ)。学校一の人気者で、彼女と付き合っているというだけで、俺の名前は学校中に知れ渡った。何も起こらない平穏な学園生活を望んでいたが、現状は大きく異なっている。

『愛とは、ともに同じ方向を見つめることである』だなんて、フランスの有名な作家が言っていたらしい。俺の進む道は、春子が進む華やかなものとは違う。このまま付き合っても、いつかは道を違えるだろう。お互い辛い思いをするかもしれないが、傷は浅い方が良い。早い内に別れるべきだ。

恋人と別れたい。そう考えている人が、今この瞬間にどれだけいるのだろうか。世の中には同じことを考えている人が大勢いる。世界中で情報が共有出来るインターネットが普及したのも、そんな人々に需要があつたからだ。そして恋人との別れ方を検索してみると、40万件近くも引つかかるのだ。先人の知恵は、後世を豊かにするために残される。ならば俺の生活を豊かにするために、恋愛のノウハウを使おう。そして春子と別れようじゃないか。



弁当は作らなくて良いと言ったものの、作ってきたものを断ることは勿体無くて出来ない。手間や食材を無駄にするのは、流石に可哀想だ。そうして結局今日も、春子と肩を並べて昼食を取っている。

相変わらず校庭裏のベンチで食事をとっているが、ここは人通りが少ない。人目がないのを良いことに、春子は俺の肩にもたれて甘えている。

春子の髪がふわりと肩を掠める。一本一本が細いせいにか柔らかい。春子の体は、どうしてなにもかもが柔らかくて温かいのだろうか。まるで春の陽気のようだ。

「よしと君の家に行ってみたいなー」

春子は前々から、俺のアパートに来たがっている。今までは、これ

を断ってきた。人を呼べる広さではないし、テレビくらいしか置いてない。だが俺には、とある目論見がある。今回は二つ返事で了承しよう。

「えっ！ いいの!? じゃあ今日行く」

今日か。まあ良いか。特に準備することもないし、最近掃除をしたばかりでタイミングも悪くない。そうして春子は今日、俺の家に来ることとなった。

アパートに帰宅し、春子が来るのを待つ。住所を教えたので、勝手に辿り着けるだろう。1DKの小さなアパートの2階。少し古臭いこと以外は、結構気に入っている。

今回なぜこのような狭い部屋に春子を呼び出したかという点、一つ試したいことがあるからだ。昔、親父がとある深夜ドラマを見ていた。それは恋愛心理学を使って、主人公の恋を成就させるという内容だった。これがなかなか面白くて、録画されていたそのドラマを親父の隣で見っていた。

その中で、主人公がとある失敗をする。部屋に連れ込んだ女性を、ディープキスだけして家に返してしまうのだ。彼にはその女性と一線を越える勇気がなかった。するとどういふ訳か、女性の気持ちは主人公から離れていく。

理由を簡単に説明すると、女性は体を許した相手には寛容になるらしい。科学的な理由は、バソプレッシンというホルモンがどうのこうのってことらしいがそこは割愛しよう。性行為をせずにディープキスだけして家に返してしまうと、考える余裕を与えてしまう。帰り道に『本当にあの人で良かったのか』、そんなことを考えてしまうのだ。これを応用して、春子にキスだけして、その後さっさと帰らせてしまおうという作戦を考えた。今日、それを実行しようと思う。

適当に時間を潰していると、インターホンが鳴った。ドアを開けると春子が立っていた。玄関の入り口で軽く手を振る少女。たったそれだけの日常的な風景。しかしそれが春子だと、ドラマのワンシーン

のように映える。いつも思うが、魅力のある人間というのは、どうしてこうも綺麗に服を着こなすのだろうか。プルオーバーシャツとスカートというシンプルな着こなしだが、淡い色が春子の雰囲気と合っている。だからこそ一つ、目につく物があつた。バッグが大きすぎる。何が入つてるんだこれ。

「来たよー。へえ、ここがよしと君の部屋なんだ」

部屋に上がると、彼女はきよろきよろと中を見回していた。あまりじろじろ見るな。変なものが落ちてないか不安になる。よく考えたら、この部屋に人を呼んだのは初めてかもしれない。春子は部屋を一通り見るとベッドに座つた。座る場所がそこしかないから仕方ないが、女子が俺のベッドに座つてるのを見るのはむずかゆい。

「なにしようか」

そういえば考えていなかった。春子は目を輝かせながら、手を上げて提案した。

「私、王様ゲームやりたい！」

別に構わないが、それ2人で出来るのか。

「大丈夫だよ。じゃあ、私から王様やるね」

ターン制なのか。まあ、特にやることもないから良いだろう。春子はベッドを手で叩き、隣に座るようにジェスチャーする。ベッドで隣り合つて座るのはかなり緊張した。彼女とはもう1年以上一緒にいるが、こういう部分はなかなか慣れない。

「じゃあ、王様とよしと君が抱き合う」

そう言つて抱きついてきた。なるほど、そういう感じか。この遊びは危険だ。体重をかけて押し倒そうとしてくる春子。残念だったな、全力で抗つてやるよ。

それよりも次の命令を出させてもらう。冷蔵庫から、2人分の麦茶を持つて来てもらおうか。

「えー、そんな命令？。いいけどさ」

春子はその場を離れ、つまらなそうに麦茶を2人分持つて来た。そしてもう一度抱きついた。これ効果が続くのか。呪縛が強すぎるだろ。

「じゃあ次私ね。王様に……キスをしなさい」

命令の内容がエスカレートしている。はい終わり。王様命令でこの遊び終わり。これが続けていたら、最後はとんでもないことになってしまう。

そうだ、映画を見よう。それも恋愛映画やホラーなんてものじゃない。俺のB級映画コレクションだ。この部屋には実家から持ってきた巨大なテレビがある。狭い部屋には不釣り合いなそのテレビは、いつも俺を壁際であるベッドの上まで置いやるのだ。

「いいよ。見ようか」

春子の了承も得たので、B級映画鑑賞を開始した。部屋の電気を消し、DVDを再生する。春子と俺は、隣り合ってベッドに座る。

暗い部屋で2人、しばらく映画を見ていた。ほう、これはなかなか面白くない。今にも寝てしまいそうだ。肩にもたれかかった春子を横目で見ると、やはり映画を見ていない。これは成功かもしれない。吊り橋効果というものを知っているだろうか。吊り橋の上では、恐怖心からくる緊張を異性を意識しているのだと勘違いする。今はその逆で、つまらない映画を見ているせいで、俺のことをつまらない男と思っているに違いない。

ん？ 春子は確かに映画を見ていない。だがなぜ俺の顔をずっと見ているのだろうか。あと上目遣いで見上げてくるのは反則だ。その角度は大抵の男に効く。その後も春子は、映画ではなく俺の顔を見ていた。なにが楽しいのだろうか。

「私は楽しいよ」

左様ですか。俺の顔は、そんなに面白いのか。本人が楽しいと言いのなら放っておこう。俺はこの退屈な映画を堪能するだけだ。

映画が終わり、外を見ると空と街の境界線だけが茜色になっていた。良い子は帰る時間だ。

「今日は帰りたくないな」

春子は最初から泊まるつもりでいたのか、帰ることに乗り気じゃない。荷物が多いのもそのせいだろう。明日が休みなのを失念してい



た。だが帰る流れにしないと、作戦が実行出来ない。明日は用事があると言つて、帰つてもらふことにした。

「もー、しょうがないなあ。次来た時は、泊まるからね」

思いの外、簡単に折れた。俺たちが恋人という関係にある以上、彼女に焦りは無いのだろう。ベッドから立ち上がり、帰宅しようと思つた。春子が靴を履いたところで、俺は彼女の肩を掴んだ。今こそ、あの作戦を実行するタイミングだ。そして思い切つて唇を押し付けた。

「んっ!？」

強引なキスに対し、春子の体は初めこそ強張っていたが、徐々に緊張がほぐれていった。ディープキスなんて芸当は今の俺には出来ないが、長めのキスをするよう心掛けた。

唇を重ねてしばらく経つた。しまった。春子が抵抗しないものだから、つい彼女の唇を堪能してしまった。急いで唇を離す。春子は俺の腰に手を回したまま、陶然とした面持ちをしている。

よし、もう帰れ。

「やつぱり、帰るのやめるね。今日は泊まつていくから」

駄目だ。今日は帰れ。なんとしても帰つてもらわないと、作戦が失敗に終わる。俺は力づくで春子を押し出そうとする。

「いやッ！　今すぐいい良い雰囲気だったじゃん。よしと君からキスしてくれるのなんて、初めてだもん。帰りたくない!」

お互いに押し合いをしているこの状況のどこが、良い雰囲気なんだ。まるで相撲じゃないか。春子を見た目よりも力があるようだが、フィジカルでは俺の方が上だ。

なんとか春子を玄関の外に追いやり、ドアを閉じた。まだ不満を言っていたが、知ったことではない。これで作戦は成功だ。春子は帰り道半ばに、俺に対して疑問を抱くはずだ。本当にこの男と付き合っていて良いのだろうか。雰囲気だけ作り一線を越えなかったことで、冷静さを取り戻す。そして世の中にもっと良い男がいるのではという結論に達するわけだ。後は、春子の方から俺に別れを言うのを待つだけだ。

人を家に招くなんて慣れないことをしたせいで、気疲れしてしまつた。少し早いけど、今日はもう寝よう。

床に着くのが早いと、真夜中に目が覚める。4時か……。喉が渴いたので冷蔵庫から麦茶を出して、コップに注ぎ飲み干した。ふと目の端で玄関を捉えた。真夜中の玄関は、暗闇へと続く異様な雰囲気醸し出す。まさかな。あり得ないとは思いつつも、鍵を解除してドアを開いた。ドアは開ききる前に、何かにぶつかった。嘘だろ……。

「あ……よしと君だー」

こいつ……帰ってないのか。春子はゆらりと立ち上がると、夜風で少し乱れた髪を手で直しながら微笑んだ。

「よしと君を、まだ感じていたかったから……少しでも近くに居たかったの」

なんなんだこいつは。狂気じみている。しかしそんな春子を見て、なぜか心が強く打ち付けられるのを感じた。彼女の手を握ると、体温が冷え切っているのが分かった。どうして春子は俺のためにここまで出来るんだ……。

春子を風呂に入れさせて、ベッドに寝かせると、早々に眠ってしまった。夜風に長く当たっていたため消耗していたのだろう。

案の定、春子はこれが原因で風邪を引いた。彼女を家まで送り届け、看病をしてやった。原因の大部分は俺にあるのだから仕方ない。春子は「なんか、よしと君がいつもより優しい」と言って笑っていたが、こつちの苦労も考えて欲しいものだ。風邪を引いたことで、少し甘えん坊になる春子はいつもより無防備だ。

……おかしい。こいつはこんなに可愛かっただろうか。

一つ目の作戦は失敗した。しかし、まだ諦めてはいない。前回は、昔見たテレビドラマという曖昧な記憶を使用したのが悪かった。もう同じミスは繰り返さない。最新の情報を駆使しようと思う。

春子を傷つけず自然に別れるには、春子に愛想を尽かされるのが最善だった。だがそれは難しいようだ。ならば俺から、別れを切り出し

てみるのはどうだろうか。前に春子が恋人らしいことが出来ていないと言っていた。それは少なからず不満があるということだ。俺の方から別れ話をすれば、案外簡単に了承してもらえるかもしれない。インターネットで恋人との別れ方を調べる。おお、かなりあるじゃないか。世の中のカップルは、どんだけ別れたいんだ。そこで集めた情報を整理するところだ。

- ・ 会って話すと、こじれる可能性がある
- ・ 直接的な文ではつきりと別れたいと伝える
- ・ 別れたい理由をしっかりと用意する

会って話すのが駄目なら、メッセージアプリを使おう。別れたい理由は、受験で良いだろう。あとは春子が会いに来れない状況が必要だ。家が知られてしまっている以上、難しい問題だ。

ふと窓を見ると、ガラスの表面を流れる水滴が目映った。今日は豪雨で、とても外を歩ける状態ではない。この時間だと、暗くて視界も悪い。春子の家から俺の家までは、結構な距離がある。簡単には来れない。今こそ、この作戦を実行する絶好の機会だった。善は急げ。スマホを手に取り、春子にメッセージを送った。当然、別れたいという内容でだ。

……返信が来ない。風呂に入るなどして時間を潰し、もう一度画面を確認したが返事は来ていなかった。

それからしばらくしてインターホンが鳴った。こんな時間に、雨の中一体誰だ。怪しいと思い、ドアの覗き穴に目を当てる。外に居たのは春子だった。しかも傘を持っていない。水の入ったバケツをかぶったかのように、全身が濡れているのである。なにやってるんだこいつは！ この前風邪をひいたばかりじゃないか。急いでドアを開けて部屋に入れる。全身ずぶ濡れだというのに、それを気にしている様子はなかった。

「よしと君……あれ、どういう意味？」

あれというのは、先ほど送ったメッセージのことだろう。しかしそんな話はどうだっていい、このままでは春子がまた風邪を引いてしまう。

「なんであんなメツセージ送ったの？ 私悪いことした？ 言ってくれないと、わかんないから……」

春子の髪から水滴が流れている。しかし目尻から流れているのは、髪から垂れたものではなかった。俺はあらかじめ用意していた答えを返す。受験が近いし、お互いに勉強で忙しくなる。そのためこれからは疎遠になる。お互いに勉強に集中するために別れるべきだ。

「勉強？ 成績に支障なんて出てないじゃん……。そんな理由じゃないよね？ 言つてよ。お願いだから……。私直すから……」

分かっていた。この作戦は、春子があつて来た時点で失敗している。いや、彼女に別れる気が一切ない時点で、何を言っても無駄なのだろう。仕方ない、このまま合わせ鏡のような会話を続けても、春子の体が冷え切っていくだけだ。不本意だが、冗談だったことにしておく。

「冗談……なにそれ。その冗談、全然面白くないっ！ もう二度と言わないでよ。私たちが離れ離れになるようなこと……。二度と言わないでよお……」

体を震わせながら、涙を流していた。それは悲しさから来る涙だったのかもしれないし、冗談だと分かって安心したからなのかもしれない。どちらにせよ、もう別れ話は禁止された。今後どのようにして、春子と別れるかという展望が見えなくなってしまった。しかし今後の方針よりも、早く彼女の濡れた服を着替えさせることが先決だ。

この豪雨の中、帰るのは無理だろう。春子がシャワーを浴びている間、布団を用意した。布団と言つても、冬用の毛布を床に敷いただけだ。春子にはベッドを使つてもらい、俺はこつちを使う。準備が終えた頃に、ちょうど春子が風呂から上がった。タオルで髪の毛の水分を取り、ドライヤーで乾かしている。女性の髪の毛の手入れというのは、大変なものなのだと思つた。

おい待て、パジャマを用意したはずだが、なぜ俺のワイシャツを着ているんだ。

「だってパジャマ大きかったんだもん。ズボン落ちちゃうし、ズボン履かないと、トップスの長さ足りなくて下見えちゃうし」

そうかそれは悪いことをした。しかし春子が着ているのは、洗面所にあつたワイシャツだろう。つまり洗っていないのだ。

「別に気にしないよ？　ちよつと汗の匂いするけど、私よしと君の匂い好きだし」

ワイシャツの袖に鼻を当て、匂いを嗅いでいる。やめろ、自分の匂いを嗅がれるのは、少し気持ちが悪い。それよりも水分が残っているせいで、ワイシャツが肌に密着して透けている。色々見えているのだ。タンスから冬用のワイシャツを出して春子に渡した。これなら生地が厚いので、少しはマシになるだろう。

色々あつたせいで時間を見ていなかったが、もう深夜0時を回っていた。春子はベッドに寝転がっている。

「この枕、よしと君の匂いがする」

こら、枕に顔を埋めるな。さつきから俺の匂いがどうこう言っているが、変なフェティシズムを持っているんじゃないだろうか。

「よしと君もこつちで寝ればいいのに」

その言葉を独り言と捉え、さつきと消灯する。毛布の上に横たわることが、普段ベッドを使っているせいか、なかなか寝付けない。寝付けないと余計な思考が働くものだ。頭に浮かぶのは、少し透けたワイシャツを身にまとう春子の姿。目に焼き付いてしまったものは、一度眠らないと落ちない。かといってそれが頭に浮かぶと、悶々として眠れない。

どうにか眠ろうと目を瞑っていると、体の上になにかがのしかかるのを感じた。なにごとかと目を見開くと、間近に春子の顔があつた。

「あ、起きてた」

なにやってんだこいつ。いや、春子がなにをしようとしているのかは分かっている。これは非常にまずい。

「よしと君、エッチ……しよつか」

カーテンの隙間から差し込んだ街灯の光が、春子の瞳に反射して怪しく輝く。サイズが合わないワイシャツの胸元には大きな隙間がある。暗いためその奥は見えないが、俺の視線はそこに吸い込まれた。なんなんだ、どうして突然こんなことを……。

「よしと君が、不安にさせるようなことするのが悪いんじゃない。あと恋人なんだから、エッチくらいするよ」

この狭い部屋には逃げ場などない。かといって春子はその気になっていたので、説得など意味がない。とにかく眠いと言って切り抜けよう。

「寝ててもいいよ。勝手にやるから」

なんとという力技だ。こいつを放っておくのは愚策だ。仕方ない。少し強引だが束縛させてもらう。

覆いかぶさっていた春子を両手で抱え、体を横に向けた。体を抑えてしまえば、なにも出来ないだろう。しかし結果的に、抱きしめる体勢になってしまった。春子は少し抵抗していたが、それもいずれ止んだ。腕の中に収まった彼女は、潤んだ瞳で俺の顔を見つめている。呼吸は少し荒い。

しばらく抱き合った状態していると、春子が寝息を立て始めた。雨に打たれたため、疲労していたようだ。幸せそうな寝顔である。助かった。しかし自分だけ起きていると、一人で居るよりも静寂を感じる。そうして冷静になってみると、いまの状況は思春期の男子にとっては生殺しのようなものと気付いた。密着した春子の体と無防備な寝顔は、俺の性欲を掻き立てる。耐えろ。耐えろ。耐えろ……。悶えるような感覚を抱え、その夜はほとんど眠れなかった。

次の日は学校があったため、春子を朝早く家に帰した。その日から、春子の俺に対する立ち居振る舞いが少し変わったように感じる。前は子犬のように、全身で感情を表現していた。しかし最近、そつと寄り添って、ただ幸せそうに微笑みかけてくるだけだった。

いつも通り、春子と一緒に昼食を食べていた。最近の彼女は疲れた表情をしているという噂がある。クラスの連中は、どうしてか春子の噂を、逐一俺に報告してくる。春子を見ると、確かに目の下にクマがあった。だが特別体調が悪いようには見えない。夜更かしでもしていたのだろうか。

「別にしないよ。でも最近ちよつと寝付きが悪くって……」

春子は大きなあくびをして、寄りかかってきた。

「んー……落ち着くなー」

本当に体が脱力しているのか、今にも倒れそうだ。そんな彼女の体を抱きとめる。

「なんでだろ……最近眠れなかったのにな……。よしと君に、ギユつてしてもらったら……眠くなっちゃった……」

嘘だろ。こいつまさか、俺がこうしていないと眠れないのか……？

あの夜、彼女を抱きしめたまま一晩過ごした。春子はあの時と同じ、安心しきったような無防備な表情でうとうととしている。

「よしと君、あのね……浮気だけはね……駄目だから……。そんなことしたら……私……ちやうから……」

そんなうわごとを言いながら眠ってしまった。別れるどころか、明らかに状況が悪化している。それに自分自身、彼女に少しづつ惹かれていたのが分かる。

それでも俺は春子とは歩めない。不釣り合いなカップルなんて、フィクションでなければ上手くいくはずがない。いずれ違える道ならば、早々に終わらせるべきだ。他人を巻き込むのはどうかと思い遠慮していたが、もう杏を頼る他ない。

## 第七話 恋人のふりか悪くない

俺は作田吉利(さくた よしとし)。俺は現在、六連星(すばる)という喫茶店でアルバイトをしている。他にもアルバイト先を探していたが、自分に合いそうなものが見つからなかった。特に、コミュニケーション能力が必要と書かれた求人には食指が動かなかった。そんな得体の知れない能力は持っていない。普通の人は、どうあがいても2割の人に好かれ、2割の人に嫌われるという。その比率を破り、誰とでも親しくなれるのは歴史に名を残すような人物だ。それを時給で雇おうだなんて無理な話だろう。

しかしながら、このコミュニケーション能力というもの、もつと別の意味合いが含まれている。そもそも組織というのは、一人では出来ないことを他者と協力して遂行するためにある。コミュニケーション能力とは、組織の中でどう他人と協力して成果を出せるかという部分を示すのだ。トークの才能などなくても、報告・連絡・相談を的確に行い、正しく成果を出せばそれで良い。

ところで俺は今、西崎春子(にしぎき はるこ)という女子生徒と付き合っている。春子は誰からも好かれる人気者。一般人の枠からは外れた人間だ。一方俺は普通の男子高校生。とても釣り合いが取れているとは言えない。

彼女ははずれ華やかな世界に身を投じるだろう。そうなれば、俺にはとても付いていけない。なんとか別れようと色々な策を講じたものの、その全てが失敗に終わった。後輩の安藤杏(あんどう あん)から相談に乗ると言われていたのに、独断で進めた結果、状況が悪化した。これが社会人なら、俺はまさにコミュニケーション能力のない人間なのだろう。

世の中には、自分一人ではどうにか出来ないことがある。それを今回の件で学んだ。だから俺は、今度こそ杏の協力を仰ぐことにした。



「先輩ってもしかして、バカなんですか？」

開口一番にそう罵るのは、杏である。近所のファミレスを拠点に



し、どうやれば春子と別れられるのか相談している。相談する際、これまでのことを説明した。しかし話している内に、杏が不機嫌になつていくものだから、途中で打ち切ることにした。

「キスとか……好きな人のために、取っておこうとは思わなかったんですか……」

そこじゃないだろう。失敗したのには、なにか原因があつたはずだ。

「まず、キスだけしてそのまま帰すやつですけど、それって落としたい相手にタブーなだけですよね。西崎先輩もう落ちてますからね？キスしたら嬉しいだけですよ」

なるほど、相手に気がない場合の話だったのか。例えば今、杏にキスだけして去つたとしよう。確実に好感度はどん底に落ちる。

「なにどきどきに紛れて、私にキスしようとしてるんですか！ やつぱり先輩は変態ですね」

待て、誤解だ。

杏は半目でこちらを見ながら、両手で人差し指同士をつついている。

「まあ、やりたければ勝手にすればいいですけど……」

やらないからな。普通に通報するだろこいつ。とにかく、これからどうするべきか決めたい。自分で色々やったが結局失敗した。女子の知り合いなど、春子の他には杏しかいない。彼女の助言が必要だ。

「西崎先輩に嫌われるのは、もう無理ですよ。普通に別れるのも難しいですね」

そうか……ん？ それ詰んでないか。

「大丈夫ですよ。私に任せてください」

片肘を机につけてグラスから伸びたストローを口にくわえながら、面倒臭そうにしている。本当にこいつに頼つても大丈夫なのだろうか。

「まあ、あれですね。とりあえず私と先輩は、明日から恋人つてことにしましょうか」

それはまずいだろう。俺は今、春子と付き合っている訳だし、それ

では浮気になってしまおう。

「だから浮気するんですよ。実は他に女がいるって言って、思いつきり振っちゃえばいいんです」

悪くないかもしれない。それなら俺が悪役になるから、春子のイメージを落とさずに別れることが出来る。春子に幻滅されれば、後腐れもないだろう。だがわざわざ恋人のふりなんてしなくても、別れ話をする際に立ち会ってくれればそれで良いのではなからうか。

「ダメです。そんなんじや簡単に嘘だつてパレちやいますからね」

そういうものなのか。女の勘つて言うのだからか、確かに春子は異常に鋭い時がある。しかしその作戦だと、俺だけではなく杏も悪者になってしまおう。

「いいんです。私は別に、他人に良い顔しようだなんて思つてないですから。先輩が私のこと好きすぎるせいでこうなつてるわけですし、少なからず私にも責任はあります」

そうか。お前やつぱ良いやつだな。しかしその責任は、本来存在しないものなのではないだろうか。まあ、杏が良いなら、恋人になつてもらおうぞ。

「っ!? な、なに言つてるんですか! ふりですからね。ふ・り! どさくさに紛れて、付き合う流れにしないでください」

してない。こいつの自意識過剰は面白いが、時々面倒臭い。

「あーあ……それにしても、西崎先輩可哀想。その気にさせちゃつて。先輩は私のことが好きなのに」

だから好きじゃないからな。そう弁明したところで、いつも通り「はいはい」と言われ流されてしまう。本当に彼女に任せて大丈夫なのかと心配になる。

とりあえず明日の放課後、杏とデートのようなものをする事になった。

俺と杏は、制服のまま駅前に繰り出した。恋人のふり、デートのふりということで、手を繋いだまま歩いている。ここまでする必要があるのだろうか。

「そんなこと言って、先輩嬉しいくせに。それに偶然誰かに見られれば、証拠になりますよ」

春子は結構疑い深い。証拠と言うものは重要かもしれない。杏も色々考えているのだなど、感心させられる。だが彼女はやたらと楽しそうだ。もしかしたら、ただ遊びたいだけなのかもしれない。

デート中になにをしたいか聞かれたが、なにをすれば良いのか分からない。デートらしいこと……思いつくのはプリクラぐらいだ。

「先輩、密室に誘い込んで何をするつもりですか。いやらしいこと考えてるんじゃないですか？」

いつも思うが、杏の頭の中に住んでいる俺はどんなやつなのだろう。会って話してみたいものだ。

嫌疑言いながらも結局俺の提案に乗ってくれるあたりが、杏らしいというかなんというか。ゲームセンターの隅にあるプリクラで、ガイドにそって写真を撮った。杏に言われるまま撮ったが、お互いに近づきすぎていて本物のカップルみたいな写真になってしまった。

「あー、これ見てくださいよ。先輩の腕、私の胸に当たってますよ。やっぱりこれが目的だったんですね」

それはお前が近づけっ言うからだ。なに写真をハートで囲っているんだ。タッチペンで色々書き込んでいるが、画像が大変散らかっている。俺の顔に吹き出しを付けられ、『I LOVE ANN』と書かれていた。これ……俺いらなんだが……。杏はそのプリクラを嬉しそうに、財布にしまっていた。こいつの生態は春子以上に謎かもしれない。

杏とのデートは、恋人らしいかと聞かれるとよく分からない。思えば春子と違って、デートらしい事はしていないので比較対象がない。しかし、それなりに楽しめた。それは杏も同じだったらしく結構な上機嫌だ。恋人のふりなんてしていると、段々とたがが外れていくものだなと思った。最初は手を繋ぐ程度だったが、今では腕を絡めて歩いている。まあ、杏が一方的にやっているだけだが。その場のノリというのは恐ろしい。

空は薄暗くなり、美しい夕焼けが広がっている。俺と杏は遊び疲れて、帰るところだ。

「せんぱーい、今日は楽しかったです。また行きましようね」

杏は後輩らしく甘え、俺の腕にもたれながら話す。こいつこんなキャラだったっけか。きつとこれも演技なのだろう。

俺たちが歩いている道路は、広い割には人も車も通らない。横にはコンクリートで整備された人工の川がある。

「ちよつと待つてください」

杏が何かに気付き、突然立ち止まった。なにごとかと振り返ると、俺の首の後ろに腕を回してきた。そして顔が近づいてきたと思うと、唇が重なった。杏は結構身長があるから、背伸びをしただけで俺の唇に届いた。驚きのあまり、思考が回らない。何をしているんだ！ 恋人のふりといっても、ここまでする必要はないはずだ。杏は唇を離し、俺の耳元で囁く。

「……西崎先輩、跡をつけてみたいですね。私たちのこと見てますよ。ほら、橋の上です」

吐息が耳にかかりくすぐったい。だが今は、それどころではない。社交ダンスのように抱き合ったまま体の角度を変えた。すると視界の端に、春子が映った。橋の上で夕焼けを背景に、ただなにをするでもなく俺たちを見ている。距離があるし逆光なため、その表情は分からない。それでも微動だにしないそのシルエットが、こちらを凝視しているのは分かった。

「西崎先輩がいなくなるまで、いちやいちやしますか……」

混乱していた。まさかいきなり春子に見つかるだなんて、考えていなかった。しかし杏は、俺と違い冷静に見えた。ここは彼女の判断に任せよう。きつとキスをしたのにも理由があるはずだ。しばらく杏と抱き合っていると、いつの間にか春子の姿は消えていた。それに気付いていないのか、まだ唇を突き出してくる杏をひっぺがす。

「あれ、西崎先輩もう居なくなっちゃったんですね」

先ほどまで春子が居た橋を見ながら、少し残念そうにしている。杏はためらいなくキスをした。ただの協力者であり、彼女なりの考えが

あつたにせよキスをさせてしまったことに罪悪感を感じる。協力してくれとは言ったが、そこまでしなくても良かったのだが。

「いいですよ別に。あーあ、ファーストキスだったんだけどなー」

本当に悪かったと思っている。だがどうして杏が上機嫌に見えるのだろうか。唇を人差し指で抑える姿が、春子と被るのだ。俺を見る眼差しと言うのだろうか、頬を赤らめているところとか、春子が俺に向けてくるものと似ていた。

「もし西崎先輩に何か聞かれても、知らないって言ってごまかしてくださいね」

杏と会っていたことを、春子は知っている。あえて誤魔化すことで、不信任感を煽るのだそうだ。やはり杏に協力してもらったのは正解だったかもしれない。相手任せの作戦ばかりだった俺とは大違いだ。

しかし今日の杏は少し変だ。恋人のふりをしていても嫌がるそぶりどころか、いつもより機嫌が良く見えた。まさか杏、お前……俺のことを好きだとか言わないだろうな。

「私が先輩を？ 先輩……願望が口から出てますよ。病院に行った方がいいんじゃないですか？」

だよな。良かった。流石に警戒しすぎか。春子とばかり会っていたせいで、変な考えに至ってしまう。

杏が言うには、恋人のふりは順調らしい。春子と別れる日は近いかもしれない。

デートを終え、アパートに辿り着いた。よろよろと階段を上る。2階は虫が入ってこないというメリットがあるが、疲れていると階段を登るのが面倒だ。階段を上り切ったところで、部屋の前に人影が見えた。春子だ。

引き返そうと思ったが、先に気付かれてしまった。笑顔で手を振っている。その笑顔は、いつも見ているものとは違うように見えた。なぜここに来たのか、おおよそ想像がつく。

「あ、帰ってきた。ちよつと話があるから、部屋に入れて」

春子は、俺と杏がキスしているところを見ていた。微笑んではいる

ものの、内心ではなにを考えているか分からない。部屋に入れようものなら、なにをされるか分からないのだ。夕飯を食べる時間だから、近くのファミレスに行こうと誘ってみる。

「うん。夕飯まだだしいいよ。話せるならどこでもって感じだし」

その後、2人並んで近所のファミレスに向かった。なんという息苦しさだ。緊張とはまた違う、成績が悪かった時の通知書を親に見られた時のような感覚に似ている。春子は黙って俺の隣を歩いているが、手を繋いだりはしてこない。確実に不機嫌だ。

ファミレスに着き、席に座る。俺は定食を注文したが、春子はドリンクバーしか頼まなかった。

「よしと君、今日誰かと会ってたでしょ」

早速本題である。杏に言われた通り、一人で居たと言って誤魔化した。それを聞いて、春子の笑顔が凍りついた。

「へえ……しらを切るんだ。私見たから。よしと君が他の女とキスしてるところ。私言わなかった？ 浮気はダメだって」

これまでにないほどの不機嫌な春子を前に、冷や汗をかく。かろうじて保っていた作り笑顔すらも消え去っている。まさか皆に笑（えみ）ちゃんの愛称で親しまれる彼女に、こんな表情をさせるとは……。杏の作戦は俺なんかを立てたものとは違い、春子との関係に変化を作り出している。

「まあいいや。どう見ても、女の子の方から無理矢理キスしてたし」

彼女はグラスに入った野菜ジュースに口をつけた後、しばらく俺の顔を見てからため息をついた。

「あんまり縛り付けるのもどうかと思ってたけど、失敗だったみたい……。もう他の女の子と話しちゃダメだよ。あと、学校ではちゃんと私の彼氏として振る舞ってもらおうから」

他の女子と話してはいけない。それはどの程度なのだろうか。まさか一言も口を聞くなとは、言わないだろう。学校では会わないようにしていたが、これからはそれも許されない。

春子は笑顔で手を握ってくる。張り詰めた空気のせいで、俺は結構手汗をかいていたが、気にせず両手で包み込んできた。

「約束だよ。破ったら許さないから。私ずっと見てるからね」

これが束縛と言うやつなのだろうか。いや、浮気現場なんてものを見せれば、程度の差はあれどこういう目にあうのだろう。全ては杏の想定通りなのかもしれない。

次の日から、春子の束縛が始まった。まさか本当に、女子と全く話せないとは思わなかった。メッセーリアプリの女子の名前も、全て消された。休み時間になれば、春子は俺の教室にやって来る。もちろん登下校も一緒だ。

困った。これでは杏に会えない。作戦は大詰めに差し掛かっていくはずなのに、最後の一手が打てない。

それともう一つ困ったことがある。これは俺にとって、今一番の問題となっている。春子が性行為を強く求めてくるようになっていた。

「彼女じゃない女の子とキスしてたよね。だったら彼女の私もキスだけっていうのはダメだよ。……絶対だめ」

そう言つて迫ってくるのだ。毎日告白してきた頃のほうが、まだましだ。今回は、長く引き延ばせそうにない。

俺からはアクションを起こせない状況。だから杏から動きがあるのを待つしかない。しかし杏は既に動いていた。俺宛の手紙を、デブに渡していたのだ。

「なんか後輩の女子から、よしと宛に手紙もらったんだけど……なにこれ？ レシピか？ 作ったら俺にも食わせろよ」

レシピを暗号に使ったのだろうか、渡す相手を間違えているぞ杏。今にもよだれを垂らしそうなデブから、手紙を取り上げる。内容を確認すると、本当に普通のレシピだった。しかし重要な部分は、この『小麦粉は、しずてつストアの19時に安売りしてますよ』という注釈だろう。

しずてつストアは近所にあるスーパーだ。そこはタイムセールなんてやらないが、19時に行けば杏に会えるという意味だと解釈した。

しずてつストアの、小麦粉売り場で杏と合流した。そこで立ち話をするのも迷惑になるので、近くの喫茶店へ移動する。

アルバイト先である喫茶店・六連星が快適なせいで、何気なく入った喫茶店は居心地が悪い。コーヒーの味も下の上。よくあるチェーン店だ。

そこで杏に現状を簡潔に説明した。

「束縛が酷いですね……。このままだと先輩が心配です。明日、西崎先輩と別れ話をしてください。私は浮気相手として後から乱入します」

杏はあらかじめ策を練ってきていたので、今後の方針についての話は早く終わった。しかし帰ろうにも、ドリンクがまだ残っている。アイスコーヒーを飲んでいる杏は、顔立ちや身長のせいで仕事帰りのOLのようなのだ。

「先輩って、私になにもしてこないですよ……。好きでもない西崎先輩にはいろいろしてくせに」

目をそらしながら、嫌味を垂れ流す。春子との関係を知っているのに、どうしてそんなことを言うのだろうか。そもそも杏に変なことをしようものなら、警察を呼ばれそうで怖い。

「西崎先輩と別れた後、どうするんですか？　先輩はフリーになるんですよね。本当に好きな人と、一緒になってもいいんじゃないですか？」

春子と別れた後か。そうしたら前みたいに……と言うのは難しいな。春子との一件で有名になってしまったし、これからは浮気をした最低男として悪い噂が立つだろう。だから卒業まではじつとしていようと思う。受験に専念して、新しい環境への準備をする。なにより恋愛とかそういうのはもういらぬ。そもそも俺には相手すらいない。

「この根性なし……」

聞こえないように言ったのだろうが、はつきり聞こえた。杏の俺に対する評価は、流石に不満だ。ならば宣言してやろう。春子と別れた後に、好きな女性と付き合うとな。



「……………!?!」

だが好きな女性など居ないし、それがいつになるだなんて言っ  
てないからな。……………ん？ 杏の顔が赤く染まっている。ああそうか、こ  
いつは俺が杏のことを大好きだと勘違いしているんだった。彼女から  
してみれば、告白されたようなものだ。まずいな、言っってしまった言  
葉が口の中に帰ってくることはない。

結局その日は気まずいまま解散することになった。明日の作戦に  
響かなければ良いのだが。そう思っていたが、杏は帰り際に「明日は  
楽しみですね」と言っていたので大丈夫だろう。……………楽しみ？ この  
作戦に楽しみな要素は微塵もない。その日俺は会話内容に細かい違  
和感を感じながらも、その正体を突き止めようとはしなかった。

## 第八話 さようならだ春子

俺は作田吉利(さくた よしとし)。普通の人生を目指し、日々努力している。最近では西崎春子(にしぎき はるこ)と付き合っていたせいで、なにかと注目を浴びている。後輩である安藤杏(あんどう あん)の協力のもと、春子と別れる計画が進行中だ。それが成功したとしても、元の日常を取り戻すことは出来ないだろう。もう十分目立ってしまったし、これからも春子と別れた男として扱われる。だがそれで良い。このまま春子と付き合っただけでも仕方がない。高校生活はもう諦めて、どこか遠くの大学を受験しようと思う。それで俺は、また一から平穩を構築するのだ。

それにしても最近、嫌な夢を見る。夢は記憶の整理をするものときれているが、なにかの予兆とも言われている。また精神や身体の状態によっても内容が変わるらしい。例えば、寝ているのに夢の中でも寝ていたら、それはひどく疲労していることを意味するそうさ。

最近見る夢というのが奇妙なもので、とても記憶の整理だとは思えない。内容は、夜中にふと目が醒めるところから始まる。なぜ起きたのかは分からない。だが、どこからか視線を感じるのだ。そしてバルコニーがある方のカーテンを見ると、隙間から何かにじっと見られている。そんな夢だ。

この夢が何を意味しているのかは分からない。悪いことの予兆じゃなければ良いのだが……。

◆ ◆ ◆  
春子はいつも通り、幸せそうに俺の隣で笑っている。これから別れ話をされるとは、微塵も思っていないのだろう。そんな姿を見ていると心が痛む。その日は彼女の顔を、まともに見られなかった。それでも春子は構ってもらおうと、いろいろちよっかいをかけてきた。そういう所がまた、小動物のようで可愛らしい。本当に、どうしてこんな子が俺なんかを好きになったのだろうか。

店は閉店し、床の掃除をしていた。ここ喫茶店・六連星(すばる)にも、随分長く勤めたものだ。結局このブラックコーヒーがなぜ美味

しいのか、その秘密を知ることにはなかった。今日でここを辞める。マスターにそれを言った時、ただ領いて了承してくれた。春子には言っていない。言わなくてもいざれ分かることだからだ。

店の掃除が終わる。マスターは買い忘れたものがあると言って出て行った。今が春子に別れを告げるタイミングだ。食器の片付けをしている春子に、話があると伝えた。

「なーに？」と言って、ぱたぱたという小気味良い足音をさせながら、俺の元にやってきた。正面に立つ春子は、何かを期待している様子だった。

一呼吸置き、別れたいのだと伝えた。

「またその冗談？ 私それ嫌い。もう言わないでって言わなかったわけ……」

聞く耳を持たないという感じでそっぽを向こうとする春子の肩を掴み、話に引き戻す。そして告げた。他に好きな人が出来た、と。

「冗談……だよね……。また前みたいに私をからかってるんでしょ？ ……ねえ」

笑顔の奥に不安が見え隠れする。そんな春子に対し、俺は黙って首を横に振った。

「うそ……。誰？ なんていう子なの？」

まくし立てられ、杏の名前が口から出かかる。だが春子の言っていることにははいはいと聞いていては、いつもの二の舞になってしまう。春子も知りたがっていることだし、ここは外に待機している杏に入ってきてもらおう。どちらにせよ、杏には立ち会ってもらおう予定だった。今がそのタイミングだ。

入店口に軽く手を振って合図をした。春子もその動作を見て、そこに視線を向ける。そして閉店というプレートの掛かった扉がゆっくりと開けられた。

「あの一、私、安藤杏っていいいます……!?!」

店内に立ち入った杏が怯んだ。今の春子が、普段の柔らかい雰囲気とはかけ離れていたからだ。春子のこんな顔は、俺も見たことがない。こんなに冷たい目が出るのか。

場の空気が一変し、同じ照明のはずなのに店内が微かに暗くなつた気がした。なんだこの重苦しさは……。肺がぎゅつと掴まれているみたいだ。

「へえ、この子が……」

そうだ。俺はこの安藤杏のことが好きなのだ。

「もしかして、この前よしと君にキスしてた子？ 髪の色、明るい。あと身長が高いんだね。美人だし顔立ちもしっかりしてる。結構目立つよね。よしと君の好みとは違うかな」

流石に鋭い。だが春子、お前より目立つやつはそういないぞ。

杏が何かを言おうとするが、春子はその隙を与えない。

「杏ちゃん、だっけ？ えっとね、よしと君は素敵だし気持ちはわかるんだけど、私の彼氏だから諦めて？」

扉の前に立つ杏を、春子は早々に拒絶した。このままでは、杏を呼んだ意味がなくなってしまう。俺の方からなにか言うべきだ。しかし俺のシャツはがっしりと掴まれており、発言したとしても距離の近い春子が先に口を挟んでしまう。そして春子は俺だけにこう囁いた。「浮気はだーめ。でも今回は許してあげるから」

俺は別れたいだけだ。許されては困る。杏もこのまま引き下がる気はないらしく、俺たちの方に歩み寄った。

「あのー、西崎先輩？ よしと先輩の言い分も、聞いてあげたらどうですか？」

杏が俺の隣に立とうとすると、その間に春子が割り込んだ。精一杯の作り笑いを浮かべながら。

「うん。そうだね。話はちゃんと聞かないとね。そうだ、じゃあ今から私の部屋で話し合おうか。二人つきりで」

待て。この流れで部屋に引きずり込まれたら終わりだ。俺の目をまっすぐ覗き込むこの目。この表情はとても良くないことを考えている時の春子だ。

「ごめんね、杏ちゃん。そういうことだから、来てもらって本当に申し訳ないんだけど、これは私たちの問題なの。帰ってもらっていいかな」

笑顔で接しているが、言っていることは『帰れ』ということだろう。「それはないんじゃないですか？ よしと先輩だって、意味もなく私をここに連れて来たりはしませんよ。その理由くらいは、ここで言わせてあげてもいいと思うんです」

春子は「うんうん」と言いながら、先輩が後輩に向けるような優しい笑顔で聞いている。否、聞き流している、が正解だ。

いなすように扱われた杏だが、彼女も余裕があるようだ。あらかじめ用意していたのだ、春子の意識を自分に向ける言葉を。

「あ、そっか。怖いんですね。よしと先輩が、西崎先輩のこと好きじゃないって分かってるんですね」

その瞬間、春子の表情が固まった。彼女の脳裏を巡るもの、それは俺が初めに別れ話をした時のこと。あるいは告白を断られ続けた時の記憶。なんにせよ、春子には思い当たる節がありすぎた。

俺のシャツから、春子の手が離れる。その手はカウンターテーブルの上に置かれ、何かを探するような動作をしていた。これは投げつけるものを探しているのか？ 俺は急いでその手を掴んだ。掴んだ手は、震えていた。

俺は告げた。はつきりと。杏のことが好きで、春子とはもう一緒にいられないことを。それを聞いた春子は、ただただ悲しい顔をして見上げてきた。

「嫌だよ……。別れるなんて出来ない。絶対ダメだから」

やはり春子は強情である。ならば俺も強情になるしかない。春子と別れた後、すぐにでも杏と付き合う。そういう設定にしてやる。

「え……！ 先輩、本当ですか！ ま、まあ、先輩がそう言うなら仕方ないですね。付き合ってもいいですよ」

口裏を合わせてはいないが、話に乗ってくれた。しかし杏の受け身な態度が、春子の逆鱗に触れた。

「な、なんなのそれ！ 仕方なくて人の彼氏に手を出さないでよ!!」

もつともである。今にも掴みかかりそうな春子を前に、杏は冷静を保っている。

「西崎先輩、最後は本人がどうしたいかですよ。よしと先輩は、私のこ

とが好きで好きで仕方がないんです。私の言うことならなんだって聞いてくれるんですよ？ ほら！ よしと先輩、私にキスしてくださいよ！ 今、ここでっ！」

……え？ そこまでする必要があるのか？ 動揺を乗せた表情を杏に送る。しかし杏はそれを無視した。彼女は興奮からか少し頬を赤らめる。どうして杏はこの状況で、そんな嬉しそうな表情が出来るんだ。

だがこれも作戦なのだろう。もうここまで来たら引き返せない、今更やっぱりなしなんてことはない。だらだらと付き合っている、春子のためにならない。ならば杏の作戦に乗るべきだ。

「だ……駄目ッ!!」

横から春子の叫び声が聞こえた。

だが俺はゆっくりと杏に口付けをした。

その瞬間、時が止まったかのように春子の声が止んだ。空間に亀裂でも入ったかのような突然の静寂。

その後すぐに、ばたばたと走る音がした。目を向けると、春子がキッチンに入って行くのが見えた。そしてすぐに戻って来た。包丁を手に持って。

「返して！ 返してよッ!! よしと君、こっち来て？ ね？ じゃないと私……! 私ッ！」

手に持った包丁を、真っ直ぐ杏に向けている。俺はその間に立って、杏をかばうように抱いた。ああ、まずい。これはやりすぎだった。このままだと、杏に危害が加わるかもしれない。彼女は全く関係ないのだ。巻き込んではいけない。また失敗だ。もうこんなことはやめよう。平穩に生きて生きたい。そんなものは単なる我儘で、他人に物理的な危害を加えてまで押し通す必要はない。

だが杏は俺の耳元で「大丈夫ですよ」と言っつて、俺の腕からするりと抜けた。そして春子の前に立った。

「いいですよ。刺せばいいじゃないですか」

「……っ！」

「出来ませんよね……。そんなことしたら、よしと先輩に二度と会え

なくなりませんもんね」

しばしの沈黙。そして、からんと包丁が落ちる音がした。

それと同時に、春子が崩れ落ちた。床に膝を付き、下を向いた彼女の顔から涙が滴っていた。

「うう……なんで……なん……で……」

そんな春子を見ていらなかった。さつきまでは笑顔だった。それがここまで崩れるとは、思っていなかった。だが別れると決めた以上は、いずれこういうことになる。傷は浅い方が良い。これで良いはずなんだ。

これ以上、ここに居たくない。そう思い杏の手を引き、帰ろうとする。しかし、後ろから奇妙な声が聞こえてきた。

「……くくく……くくくく……」

何かを堪える声。これは春子のものだ。なぜ……なぜなんだ。

「あはっ、あはははははははははは！　なんでツ……きやはははははっ！

よしと……くんっ……いひっ、あは、あはははははははははははっ!!!」

なぜ春子は笑っているのだろうか。両目から大粒の涙を流しながら、どうして笑えるのだろうか。

「せ、先輩、やばいですよあの人。早くここから出ましょう」

普通ならばこの光景を見て、春子がおかしくなったのかと思うのだろう。だが俺は彼女が笑っている理由が分かってしまった。『辛い時や悲しい時でも、笑顔でいれば幸せになれる』。それは春子の母親が残した言葉だ。春子は今、どれだけ辛いのだろうか。どれだけ悲しいのだろうか……。

俺が引いていた杏の手が、今度は俺の手を引つ張っている。春子の笑い声が鳴り響く中、喫茶店・六連星を後にした。

帰り道、杏と寄り添って歩いた。怖かっただろう。包丁を向けられる経験など普通はない。彼女を家まで送ったが、杏は俺の方を心配していた。大丈夫だ。春子は気が動転してただけで、本来なら誰かに危害を加えるようなやつではない。

帰宅したものの、どうしても今日あった出来事を思い出してしま

う。あそこまで取り乱した春子を見たのは初めてだった。ずっと平凡な日常を目指して生きてきた。それが最も平和に過ごせる方法だと思っていた。しかし春子を傷つけてしまった。俺なんかのために、あそこまで涙を流すとは思わなかった。彼女は今何をしているのだろうか。

なにもやる気が出ないので、眠くもないくせにベッドに横たわった。すると音声通話の着信が鳴った。杏からだ。

「もしもし、先輩？ 無事に帰れましたか？」

心配してくれたのか。杏は俺の声を聞いて、安心したという感じで一息ついた。

そういえば、まだお礼を言っていないかった。よく考えてみればこの件に関して、杏は全くの無関係だ。だというのに、真摯に俺の相談に乗ってくれた。なにかお礼をしなければならぬ。

「いいですよ、お礼なんて。それよりも、明日からよろしくお願いしますね」

見返りを求めないとは、なんて良い後輩なのだろうか。杏への考えを改める必要があるようだ。……ん？ 明日からよろしくってなにをだ？

「いやだなあ、先輩はもう私の彼氏じゃないですかー」

もう恋人のふりは終わった。きつとこれは、俺を安心させるためのジョークなのだろう。包丁を向けられたことで杏の精神状態が心配だったが、冗談を言える余裕があるのなら大丈夫そうだ。

他愛もない話をした後、通話を切る。切った直後に、また着信が鳴った。言い忘れたことでもあったのかと思い、差出人も確認せず反射的に通話を取る。

「……」

おかしい。電波が悪いのだろうか。

「……………く……………く……………」

笑いを堪えるような声が聞こえる。……春子か。ようやくスマホの画面を確認し、差出人を見た。西崎春子とはつきりと出ている。

「あははっ……………よしと君だ！ 出てくれたあ……………」



なにが面白いのか、彼女の笑いは止まらない。別れたからといって、いきなりブロックするのもどうかと思ったが甘かった。すまない春子。もう俺には掛けてこないでくれ。

「えー？ ……だってえ ……恋人のふりだったんでしょ？ …… だってら別にいーじゃん …… きやはっ」

どうしてそれを ……！ 杏との通話を聞いていたかのような口調だ。ありえない。この狭いアパートに居るのは俺だけだ。

「あとー、シャツのまま寝転がっちゃだめだよ …… くくく …… シワになっちゃう。あとねー、毎日カップラーメンやコンビニ弁当ばかりだと体壊しちゃうよ。今日だって食べてたでしょ？ 唐揚げ弁当！ …… ねえ、今から作りに行つてあげようか …… あは …… あははははっ」

コンビニで買った唐揚げ弁当を、夕食に食べていた。なぜ知っている。なぜ俺が制服のまま寝転がっていることを、知っているんだ！

電話越しに聞こえる、けたたましい笑い声。怖くなって、通話を切った。そして春子の連絡先をブロックした。これで本当にさようならだ、春子。

翌日、春子は学校を休んだ。昨日の通話といい、少し心配になってきた。しかし今は彼氏でもなんでもない。春子にしてやれることなんてなにもない。

春子が居ないことで、淡白な日常が戻ってきた。なにも起こらない1日。それに物足りなさは感じない。浮気のことだって、春子が登校していないのだから広まっていない。

放課後、杏が校門の前に立っていた。何事かと他の生徒たちが注目している。主に男子生徒だが。どうしたのだろうか様子伺うと、話し掛けてきた。

「あ、先輩、一緒に帰ろうと思って、待ってたんです」

手を握ってくる。まるで恋人同士のような会話だ。恋人のふりはもうしなくて良いんだぞ。まだ春子と別れたという噂だって流れていない。こんな人の多い場所で手なんて繋いだら、周りからおかしな

目で見られてしまう。

「西崎先輩と別れたら、付き合うって約束だったじゃないですか」

あれは春子と別れるための口実だ。杏だって分かっているだろう。

「わかんないですよ。約束は約束です」

おかしい。どこかで認識のずれが生じている。そのせいでいつまで経っても、会話が噛み合わない。

すっかり話した方が良いと思い、杏を公園に連れて来た。このベンチなら落ち着いて話せる。しかし座ったのは俺だけで、杏は立っただけのまま見下ろしている。少し威圧感があった。

そもその問題として、杏は俺のことを振っている。好きでもない相手にどうして付き合うだなんて言えるんだ。

「それ、いつの話ですか。ほとんど初対面の時ですよ。今は別に……先輩のこと、好きですよ……」

それは異性としての好きなのかと確認すると、杏は「はい」とはっきり肯定した。

目眩がする。完全に予想外だった。まさかこんな根本的な部分で、誤解があったとは。どうするんだこれ。春子の時といい、どうしてこいつもこじれるのだ。

「もう満足ですか？ 私たちは今日から恋人です。それでいいじゃないですか」

良くない。それでは春子と別れた意味がなくなってしまう。人気者なのは杏だって同じだ。とても俺とは釣り合わない。それにもう、これ以上目立ちたくない。ここ数日間春子と付き合っていたことで、十二分に注目を浴びた。

「それも手遅れですよ。西崎先輩という相手がいるのに浮気したんですから、超有名人になりますよ」

それはそうかもしれない。別れ話すらも禁止された中で、別れる手段はそう多くなかった。そこで他に好きな人がいるという理由を、無理やりでっち上げた。これから浮気という、最悪のレッテルが貼られる。そもそも高校生活を平穏に過ごすのは、春子と付き合った時点で諦めている。それにしたってわざわざここで杏と付き合って、状況を

悪化させる必要はないだろう。正直もう放っておいてほしい。

「あー、もう！ 先輩はあれこれ考えすぎです。いいじゃないですか。お互いフリーなんですから」

恋人のいないやつなど、いくらでもいる。

そうやって意見を変えないという姿勢を見せていると、杏はわざとらしく肩を落として後ろを向いた。

「あーあ、私先輩に協力したのに。ファーストキスまでして。終わったら先輩と付き合えるって思ってたのに。西崎先輩に包丁を向けられた時は怖かったなー。そこまでの後輩を振るんですね。フリーのくせに……」

随分と流暢に長ゼリフが出て来るものだ。最初から用意していたようだ。しかし、これは言い返せない。杏に負担を掛けたのは確かだ。

不意を食らっていると、隙が出来たと言わんばかりに杏がにやりと笑った。

「じゃあ私たち付き合ってたってことで、よろしくお願いしますね。せんぱい」

弾んだ声でそう言うと、走り去って行った。なんて強引なのだろうか。杏が俺のことを好きだった。そんな事実には驚いている暇すら与えられなかった。

## 第九話 油断した

俺は作田吉利（さくた よしとし）。平穏な毎日を送りたいだけの高校2年生だ。平穏、平凡、普通や保守的であることに、価値を置いている。

価値観というのは人それぞれ違っていて、それこそ人の数だけ存在している。お金が重要な人もいれば、お金よりも絆を大事にする人もいる。これが価値観の違いというやつだ。俺の価値観は先ほど述べた通りだ。ではその平穏な暮らしを突き詰めてみると、何に辿り着くだろうか。普通で平和な暮らし。誰にも認知されない人生。そこにはなんの危機もなく、生命の安全がある。もしかしたら、俺の価値観の本質は、そこにあるのかもしれない。

俺は少し前まで西崎春子（にしぎき はるこ）という女子生徒と付き合っていた。彼女は頻繁に性行為を求めてきた。俺はそれを最後まで受け入れなかった。性行為の本質は、生命を生み出す行為だ。これは俺の価値観からすると、かなり重要なこととなる。結果、責任が発生してしまうのだ。

この辺の価値観は、春子だって同じなはずだ。俺に体を許そうとした彼女の覚悟は、本物だったのだろう。だからこそ、それを受け入れることは出来なかった。

◇ ◆ ◇

春子と別れてから数日経った。別れた翌日、春子は学校を休んだ。取り乱した春子の姿は記憶に新しい。先日のおかしな通話といい、大丈夫なのかと心配になった。

しかし、春子が休んだのは1日のみだった。学校に来た彼女は、本来の明るい性格に戻っていた。元気いっぱい、周りに笑顔を振りまく人気者のままだ。気がかりなのはあのおかしな通話だが、あの時は気が動転していただけに違いない。

ある日、学校の廊下で春子に呼び止められた。なにを言われるかと警戒したが、「もう大丈夫だから」とだけ言い、小さく笑って歩き去った。良かった。自分でも結構酷いことをしたと思っている。しかし

彼女は立ち直っていた。俺が思っていた以上に、強い心を持った女性だった。とにかく、もう彼女を心配する必要はない。

俺の日常はというと、春子と付き合う前に戻っていた。春子は、俺が浮気したことを誰にも言っていないらしい。気を使ってくれているのかもしれない。恋人がいなくなつたことで、昼休みは平社員、デブと共に居る。3人で栄養のない食品を食べている光景は、懐かしきすら感じた。

「お前、最近笑ちゃんと飯食わないんだな」

平社員は知らなかったのか？ 結構前に俺と春子は別れた。それを聞いても平社員は、驚いていない。当たり前か。俺と春子とでは元々釣り合っていない。しかし平社員の表情をよく見ると、驚いてはいないものの腑に落ちないという感じだった。

「お前その嘘は無理があるぞ。笑ちゃんがフリーになつたなんて噂があつたら、とつくに広まつてるはずだ」

それでも俺は春子と別れたんだ。そう説明しても、やはり平社員は納得がいかない様子だった。

春子はまだ他の人に言っていないのだろうか。まあ良いか。彼女にも事情があるのだろう。変に噂になるよりは、自然に浸透していった方が、注目は少ないはずだ。黙って影を潜めていよう。そうして、皆が忘れた頃に卒業するのだ。

トイレで手を洗った後、ハンカチを忘れたことに気付きズボンで拭こうとした。すると横からハンカチが差し出される。振り向くと笑ちゃんファンクラブ元会長こと佐田源太郎（さだ げんたろう）が居た。正直、人のハンカチは使いたくないので断った。

春子と別れたことをわざわざ広める必要はない。だがこのメガネには、伝える義理がある。ちようどここには誰も居ないし、話しておくか。

「なんだって？ 笑ちゃんと別れたのか。それは変だな。いつ別れたんだ？」

もう一週間以上経つだろうか。元会長は難しい顔をして、考え込ん

でしまった。春子を守る人物がいなくなったことで、もう一度ファンクラブを結成しようと考えているのかもしれない。そう思ったが、どうやら違うようだ。

「おかしいな。そんな話は聞いたことがない。それに、笑ちゃんが今まで通りすぎる」

それはそうだ。彼女は俺のことを、引きずってなどいないのだから。これから春子は、俺のことなんて忘れて生きていく。平社員といい、どうして春子と別れたことを素直に信じないのだろうか。

「今まで通りというのは、君と付き合う前に戻ったという意味ではない。君と付き合っていた時のままだという意味だ」

元会長が言うには、春子は俺と付き合ってから変化があったそうだ。前は、いわば営業スマイルの上手な女の子という感じだった。それでも完璧な笑顔だったそうだが。しかし俺と付き合ってから、ただただ幸せそうに見えたそう。そんな些細な変化が分かるものなのか。この男の洞察力は侮れない。

しかしそれが意味することが、俺には分からない。ファンクラブ元会長はしばらく考えた後に、俺の肩を一度だけ叩いた。

「そうか……。まあ、頑張りたまえ。私はなにがあっても笑ちゃんの味方だ」

なんだそれは。そこは俺の味方でもいて欲しかった。お前の推理はどこに辿り着いたんだ。それを問いただそうとすると、彼は不敵な笑みを浮かべてトイレから出て行ってしまった。

喫茶店・六連星（すばる）を辞めたことで、学校にだらだらと居る時間が増えた。新しくアルバイトを探すより、受験に向けて予備校に通った方が良いかもしれない。

いつまでも学校で時間を潰していても仕方がない。帰宅しようと階段を降りると、下駄箱の前に春子が立っていた。

「あ……よしと君。ちょっといいかな。連絡手段がないから、ここで待ってただけど……」

一瞬身構える俺に対し、春子は適度に距離を取り小声で用事を簡潔

に伝えた。用事とは、最終月の給料を支払いたいのだそう。そういうば、連絡先をブロックしたままだった。

こうやって話してみると、もう俺とのことを気にしていないのだと改めて認識した。ファンクラブ元会長が懸念していたことは、気のせいだったのだろう。この笑顔は俺だけに向けられたものではない。皆に愛される笑ちゃんの笑顔だ。少し寂しい気もするが、結果的にはこれで良かったのだろう。

「だから、うちにお給料取りに来て。あ……大丈夫だから。変なことしないから」

春子の家に行くのは、まだ抵抗がある。しかし現金を直接持ち歩くのは、女子にとっては危険だ。今の彼女が相手なら大丈夫だ。俺になにかしてくる様子も見受けられない。

「じゃあ、あとでね」

春子はひらひらと手を振って、玄関口から出て行った。外に出て行く彼女の姿は、暗い校内に俺を置き去りにし、明るい世界に消えていくように見えた。きつと今日が最後だ。明日からはもう、話すこともないだろう。俺の人生で最も美しい時間となった彼女との関係は、今日で本当に終わる。

◇ ◆ ◇

私の名前は安藤杏(あんどう あん)。私は今、3人の女子生徒に囲まれている。トイレなんかに来てきて、どうするつもりなんだろう。この3人を知っている。西崎先輩の友人だ。

しかし、彼女たちは不良とかじゃない。少し怖いけど、私になにかしてくることはないと思う。

「あんたさ。笑(えみ)ちゃんの彼氏にちよっかい掛けてるでしょ」  
最初は西崎先輩の差し金かと思った。でもわざわざ友人だけを差し向ける意味なんてない。誰かが私とよしと先輩が一緒にいるところを見て、それをリークしたんだと思う。はあ、そもそも西崎先輩とよしと先輩は別れてますから。そんなこと、西崎先輩の友人であるこの人たちなら知っているはずなんだけど……。

よしと先輩と別れた次の日、西崎先輩は学校を休んだ。でも翌日か

ら平気な顔をして学校に来た。もう西崎先輩は吹っ切れた、そう聞かされている。

「ちよ、ちよっと、別れたってそれホント……？　笑（えみ）ちゃんはそんな話、してなかったよ」

その言葉を聞いて、凄まじい違和感に襲われた。待つて、おかしい。どうして知らないの？　先輩たちも異変に気付いたのか、先ほどまでの威圧感はなくなっている。彼女たちも、最近の西崎先輩がどこか変わったことに気づいていたんだと思う。

「今日だつて……作田君と会うつて言つて帰つたよ？」

心配そうな表情で、お互いに頷き合っている先輩たち。

やばい。私は思わず走り出していた。後ろから先輩たちが「おい、どこ行くんだ」と慌てていたが、彼女らに構っている時間はない。早くしないと手遅れになる。

向かったのは西崎先輩の家、つまりは喫茶店・六連星（すばる）だ。喫茶店は閉まっていたから、裏の玄関に周りチャイムを押した。焦る気持ちと、走ってきた疲労により短気になっている。インターホンのボタンを何度も押した。……音が鳴らない。電源を切ってるんだ。窓を割って侵入しようにも、雨戸が閉められている。やられた。ここまでするとは思わなかった……。

お願い先輩、どうか無事でいて……。

◆ ◆

喫茶店・六連星に着くと、プレートがCLOSEDになっていた。そういえば今日は定休日だったな。扉を開けると、春子がカウンター席に座つて待っていた。

「あ、よしと君、来たんだ。喉乾いてるでしょ、なんか飲む？」

それほど喉が渴いているわけでもないし、あまり長居はしたくない。給料だけ貰つて帰ろうと思つた。しかし店の中はコーヒーの良い香りがしている。これが最後。そう思うと、このコーヒーが無性に飲みたくなった。本当はブラックコーヒーを所望したいが、あれはマスターしか作れない。いつも春子に作ってもらっていたカフェオレで妥協しよう。



「カフェオレね。分かった」

慣れた手つきでカフェオレを作る春子。その後ろ姿を眺める。いつも見ていた光景だからか、手順を覚えてしまった。しかし今日は一手間多いように感じた。

「あ、そうだ。ひとつ頼みたいことがあるの。私の部屋ね、本棚を捨てようと思つてて、運ぶの手伝ってくれない？ お父さんは腰痛めそうだし」

確かに一家の大黒柱が倒れたら大変だ。仕方ない。そのくらいは手伝つてやるか。それにしても元カレを顎で使うとは、春子も悪女になつたものだ。

カフェオレを飲んだ後、春子の部屋に行つた。……？ 本棚が見当たらない。説明を求めようと思ひ、春子の方を向いた。その瞬間、がちゃんという金属が合わさる音がした。ドアの前に春子が立っている。そしてドアノブには、壁に通したワイヤーが巻かれ、大きな南京錠が掛けられていた。

「どうしたの？ よしと君。汗がすごいよ」

話が違う。何もしないと言つていたじゃないか。

「なにもしない、なんて言つてないよ。変なこととはしないつて言つただけ。これから恋人として当然のことをするだけだよ」

恋人？ 俺たちは別れたはずだ。そんな俺の反論に対し、春子はただ笑つて返した。微笑みではない、腹を抱えて笑っているのだ。

「あはは……ごめん、笑っちゃった。だって恋人が別れるのつて、二人で決めることでしょ？ 私、別れていいよなんてひと言も言つてないもん」

俺が間違えているかのように言っているが、春子は明らかに俺を騙した。学校では気の無いふりをして、ここにおびき寄せたのだ。油断した。平社員やファンクラブ元会長が違和感を口にした時に気付くべきだった。

だが、それよりも大きな問題がある。さきほどから頭が回らないのだ。それに動悸が酷い。やられた。一服盛られた。さつきのカフェオレに、何かを入れたのだろう。

狭い部屋の中で、春子と二人。2階なので窓からは出られない。出口は南京錠の掛かったドアだけだ。そんな状態の中、俺は薬によって激しく欲情している。

「あれー、なんだか苦しそうだよ？」

腕を後ろに組んで、嬉しそうに一歩ずつにじり寄ってくる。それを押しのけて距離を取った。あまり近寄られると、理性が飛んでしまいそうだ。

「この部屋から出たいの？ だったら南京錠の鍵を使えばいいんだよ。鍵は私が持つてるから」

春子はそう言っただけでベッドに横たわった。鍵……そうだ鍵だ。くそっ、頭が回らない。とにかく、今はその鍵を使って外に出なければならぬ。ベッドに寝ている春子から、奪い取らなければならぬ。「鍵はねー。うーん。あ、そうだ、胸の谷間にあるよ。探してみて」

俺は覆いかぶさるように、春子の上に跨った。急げ、とにかく鍵なんだ。ぼうつとする思考の中、制服のシャツを剥ぎ取り胸元へと手を入れた。シャツのボタンがいくつか外れて、床を転がっていたが気にする余裕はない。

「やんっ、激しい。そこじゃないよ。ブラも外さないと見つからないから」

春子はそう言いながら、俺のシャツのボタンをひとつずつ外している。薬のせいでも考えられない。言うことを聞くしかなかった。ブラジャーの外し方なんて分からないが、力づくで引っ張ると簡単に外れた。

そうして露わになった春子の胸を見た瞬間、股間に衝撃が走る。は……はやく鍵……を……。

「ごめん。嘘。鍵はそこにはないよ。本当はパンツの中」

何も考えられなかった。ただ鍵というキーワードだけを頼りに、彼女のスカートを思い切り脱がし、それから……俺の意識はフェードアウトした。

◇ ◆ ◇

よしと君から別れを告げられた次の日、私はただ泣くことしか出来

なかった。無理矢理笑顔を作っても、天気雨みたいに目から落ちる涙は止まらなかった。笑ちゃんという愛称は見る影もない。とても学校になんて行けそうにない。

よしと君のいろいろな表情が頭をよぎる。そして……別れ際のあの表情、悲しそうな眼差し。彼にあんな顔をさせてしまった自分が情けない。

盗聴や盗撮だなんて身勝手なことしたって、なんの意味もない。彼がどうしてあんなことを言い出したのかが分からない。

お母さんの言葉を思い出す。

『辛い時や悲しい時でも、笑顔でいれば幸せになれるの。だからあなたにはいつも笑っていて欲しい』

お母さん……私頑張って笑ったよ？ それなのに……今、全然幸せじゃないよ……。

このお仏壇の前で泣くのなんて、いつぶりだろうか。そう思い顔を上げると、ふとお母さんの遺影が目に入った。懐かしい顔だ。……笑っている。

お母さんと過ごした日々は本当に幸せだった。この笑顔に何度元気をもらったことだろう。

……そっか。この笑顔は、私を幸せにしていたんだ。

簡単なことだった。私がよしと君を幸せにしてあげればいい。彼はずつとなにかに囚われている。それが何か分からないし、本人もそれを語らない。しかし彼が最後に見せたあの表情、あれは後悔。好きな人にあんな顔をさせてはいけない。このままではいつか彼は不幸になってしまう。ずつと彼を一番近くで見えてきたんだから分かる。

また私は、お母さんの前でなんて顔をしていたんだ。笑え春子。笑え。

よしと君を幸せにするためなら、なんだつてしてやる。そう決めた。



ちゅんちゅんと言う鳥の鳴き声で目を覚ます。鳥が騒いでいるということは、早朝だ。寝起きだというのに、気だるさが半端じゃない。

二日酔いを経験したことはないが、こういう感覚なのだろうか。

それにしても、ここは俺の部屋ではないな。ベッドも違う。寝ぼけ眼をなんとか開けると、ぼやけた視界がクリアになっていく。そして気付いた。横に全裸の春子が寝ていることに。そして俺も裸である。なんだこの状況は、いや大体想像が付くが認めたくない。体を半分起こして、思考を巡らせた。そして昨日のことを思い出した。忘れてしまえば良かったものを、細部まではつきり覚えていた。

俺が体を起こしたことで、春子も目を覚ました。

「ん……起きてたんだ……おはよう、よしと君。んー、パパって呼んだ方がいいかな」

パパ？ ……そうか。昨日は避妊なんてする余裕はなかった。妊娠していてもおかしくない。くそつ、やってくれたものだ。既成事実を作られてしまった。こんな状況だというのに、春子は朝から幸せそうに微笑んでいる。

……俺は負けたのか。

春子は恐らくなにか薬を使った。それを理由に彼女を突き放すことだって出来る。だが俺の持つ、道徳観と言うのだろうか。体を重ねた相手とは、そう簡単に別れようとは思わない。責任を取らなければならぬと思うている。きつと春子はこれに気付いていたのだろうか。「だってエッチするのすごく嫌がってたから、それって責任感からきているのかなって思ったの。優しいね、よしと君は」

よく見ているな。これはもう敵わない。

春子は服を拾うと、風呂に入ると言って部屋を出て行った。俺も床に散らばった衣類を集めて身につけた。シーツがかなり乱れている。昨日の夜はお互いに初めてだった。なにをしていたのか、そんなことはとても俺の口からは言えない。しかしなんと言うか……昔誰かが、性行為は想像よりも気持ちよくないなんて言っていた。しかし相性というものがあるようだ。俺と春子のそれは、お互いに満足出来るものだった。

春子が風呂から上がった。風呂上がりの彼女は、何度見ても色つぼ

い。そう思つて春子を眺めていると、「なに？　もしかしてやりたいの？」と言つて近づいてきた。無尽蔵に搾り取ろうとするのはやめてくれ。疲労が全く取れていないんだ。

ベッドに座つて、タオルで髪を乾かしている春子の隣に座る。俺は彼女に言つておきたいことがあつた。

体を重ねた以上、俺はお前とちゃんと付き合おうと思う。

「だから、もう付き合つてるから」

真剣に言つたはずなのに、当たり前だというふうに返事をされてしまった。まあ良いか。別れる気はもうない。それが分かつてもらえれば。

この部屋に長居しても、やることがない。また変な気を起こす前に、さつさと帰ることにした。流石に今日は、学校には行けそうになり。

喫茶店は閉まつているため、裏の玄関から外に出た。まだ秋にはなつていないが、結構肌寒い。春子は玄関前の道路まで見送ると言つて、一緒に出た。

喫茶店の裏から路地に出ると、思わぬ人物が現れた。こんな早朝になぜ杏が……。いつから居たんだ。

「やつと出てきましたか。インターホンの電源を落とすなんて随分周到なんですわね」

敵意をむき出しにして、春子に詰め寄る。杏は身長が高く、顔つきが大人びているので、睨み付けると迫力があるのだ。しかし春子は動じない。それでも杏は食つてかかった。

「今は私の彼氏なんです。西崎先輩は別れたんですから、手を出さないでくださいねか」

「えー、人違いじゃない？　よしと君はずっと私の恋人だよ。ね？　よしと君」

ここで俺に振るのか。だが、ここははっきりしておいた方が良さそうだ。俺はもう春子の恋人なのだから。

「ほら、よしと君もこう言つてるし」

「先輩!?　どうしたんですか！　西崎先輩になにされたんですか！」

なにをされた……か。よく考えたら、とんでもないことをされてい  
る。それでも、こうなってしまったからには責任は取るつもりだ。

「最ッ低ッ！」

杏は春子の胸ぐら目掛けて手を伸ばしたが、俺がその手を掴み阻止  
した。そんな状況の中、春子はけろつとした顔をしていた。

「えつと……ところで、あなた誰だっけ」

たったそれだけの言葉。杏は口を動かし何か言おうとした後、突然  
血の気が引いたような表情になった。杏から力が抜けたので、取り押  
さえていた手を緩めた。

「なんで……なんでよ……」

そう呟きながら、杏はふらふらとその場を立ち去ってしまった。一  
体なにがあつたのだろうか。足取り悪く歩く杏の後ろ姿は、なぜだか  
小さく見えた。『あなた誰だっけ』、そんな何の含みもない。春子の天  
然から出た発言。それに杏は、なにを感じ取ったのか。俺には全く分  
からなかった。

## 最終回 知ってたのか

俺は作田吉利（さくた よしとし）。平穏な日々を過ごすことを目標とする、普通の高校生だ。

誰にも認知されず目立たず暮らす方法として、普通になることを選んだ。普通になるには、他人と同調し平均になる必要がある。それは相当難しいことだと思う。

他人の心など誰にも読めない。下手をすれば本人にだって分からない。人は今だけでなく、過去や未来を持っている。今、高カロリーなものを食べたいと思っていたとしよう。しかし、未来を見据えて太らないために、食べたくないと言うかもしれない。

そんな言動と異なる、人間の心理など分かるはずもない。分からないから西崎春子（にしぎき はるこ）なんて人気者と付き合う羽目になった。

ちなみに、『春子と別れたい』と言っていたのは、『目立たず平穏に暮らす』という未来を考えてのことだ。今だけを考えれば、春子との関係をそう悪いものとは思っていないのかもしれない。



放課後、俺は1年の空き教室横にある、ロッカー前に呼び出された。ここに呼び出すやつなんて一人しかいない。杏だ。人気も少なく、薄暗いこの場所で彼女は膝を抱えて座っていた。

「先輩……」

俺に気づくと、一瞬だけ顔を向けてまた下を向いてしまった。昨日のことがあったせいか気まずい。しばし沈黙が流れる。

「……西崎先輩とやったんですか？」

直球な質問が飛んできた。面食らったが、それに対し素直に頷いた。ここで、はつきりさせておかなければならない。俺を好きという杏の気持ちには、応えられないと。杏は相変わらず目を合わせずに、膝を抱える腕の力を強めた。

「自分をレ〇プした相手と付き合うなんて、おかしいですよ。そんなんでいいなら、今からここでシマシマしようか」

やめてくれ。おかしいことを言っているのは、杏も分かっている。テンションの下がりきった声で「冗談ですよ……」と言った。

それにしても今日の杏は元気がない。一体どうしたのかと聞くと、少し黙った後にまた話し始めた。

「西崎先輩が私に、『誰?』って言ったんです。私、あの人のライバルのつもりでした。恋のライバル……。でも違った。私のことなんて眼中になかった」

杏の話は分かる。だがそんなことで、ここまで落ち込むだろうか。杏だつてそこまで春子に興味はなかったはずだ。

「違うんです……」

膝に顔を埋めてしまった。表情は見えないが、その姿勢から悲壮感が漂っている。

「西崎先輩は私のことなんて眼中にない。それを知った時、気付いちやっただんです。あの人が私に包丁を向けた時、恋敵に向けられたものだと思つた。それはただの脅し、怖くないんです。でも違った。あれは、人間に向けられたものだったんです……」

春子は杏を覚えていなかったわけではないが、思い出す時間が必要な程度の認識だった。恋敵として憎んでいるのであれば、そんな相手を忘れるはずがない。春子が包丁を向けた相手は、恋敵である安藤杏ではない。俺と春子を引き裂こうとする人間。目的は単なる排除。

「私、もう無理なんです。今回だつて西崎先輩から奪い返してやろうと思つてました。でも、それをやったら……何度でも何度でも、西崎先輩は……」

話はそこで途切れた。だが言いたいことは分かる。春子は何度でも立ち向かつてくるのだろう。それも、回を重ねるごとに狂気が増していく。そんな相手と何度も衝突すると思うと、疲れてしまった。

「なんでなんですか……。あの人じゃなければ……。あんなの……。ずるい……」

顔を埋めたまま、ぶつぶつと無味乾燥な胸の内を吐き出した。杏の言いたいことを大体察した。別れを告げているのだ。春子への白旗、それ即ち俺との別離。ならば俺のやることはたった一つ。杏の意を



汲んでやるだけ。さよならを言うだけだ。これで終わりにしよう。もともと彼女の気持ちには応えられなかったのだ。

杏は無言のまま首を縦に振った。

「……先輩。最後にキスしてください」

それは出来ない。もう春子の恋人なのだから。そう言つて後ろを向いた俺に、杏は一瞬だけ顔を上げて「……待って……嫌だ……」と小さく呟いた。振り返ったりはしない。彼女に気の利いたことが言えるほど器用じゃない。ただ黙つて立ち去ろう。

杏とはもう会わない方が良く。春子に心配を掛けたくないし、杏だつていつまでも俺みたいな奴が近くに居たら、気持ちの整理がつかない。

面白い後輩だつた。色々な勘違いをして、突っ走つて。振り回される身にもなつて欲しかった。だが、なんだかんだ後輩として可愛く思っていた。そんな彼女ともう会えないのだと思うと、少しだけ胸が痛んだ。

突然だが、俺は自分の部屋で正座をさせられている。目の前には春子が笑顔で立っていた。しかし目は笑っていない。

「これなーに？」

春子が手に持つてひらひらと見せるのは、スマホの画面。待て、それは俺のスマホだろう。ロックが掛かっていたはずだ。

「彼氏の指紋くらい持つてるよ」

そつちか。パスワードを知っている程度かと思っていた。どうやって指紋認証を解除したんだ……。

「で？　これなーに？」

エロサイトだな。男の嗜みだ。

「何に使うの？」

自慰行為だ。他にどう使うと言うのだ。ヌードデッサンなどには使うかもしれないが、あいにくそんな趣味は嗜んでいない。

俺の部屋にやってきた春子は、いつも通り上機嫌で俺に甘えていた。しかしコンビニに行つて帰つてきたら、大層不機嫌になつてい

た。原因は俺のスマホに入っていたエロサイト。男なんだからこういうサイトの1つや2つや3つや4つ見る。

「ダメだよ。私がいるんだよ？ 呼べばいいじゃん。欲求不満な時は」

そんなことで、いちいち恋人を呼ばないだろ普通は。春子が言う『恋人だから当たり前』は大抵ろくなものではない。

「よしと君には彼女がいるの！ つまりよしと君の体は、私のために精子を作ってるんだよ。それを無駄遣いするなんてダメ」

人を精子を製造する機械みたいに言うな。

俺が恋人として真面目に付き合うと決めた日から、春子の愛情は増大している。甘やかしすぎたのが悪いのかもしれないが、射精管理までされたらたまったものではない。

ここは、はつきり言っておいた方が良い。これからしばらく性行為は禁止だ。

「無理。今だって全然足りないもん。私怒ったから。これからは1日5回以上、必ずエッチしてもらうから！ オナニーする余裕があるなら大丈夫だよ」

無茶を言うな。とんでもないカウンターを食らった。春子は頭に血が上っているせいで、少し興奮気味だ。息切れをしながら、迫ってくる彼女を見て危機感を感じる。話題を逸らして、なんとか誤魔化そう。

そうだもうすぐ春子の誕生日じゃないか。なにか欲しいものはないのだろうか。

「誕生日プレゼント？ 別に用意しなくていいよ」

意外だ。プレゼントだなんて春子が一番喜びそうだ。しかし面と向かって、要らないと言われてしまうと結構ショックだ。

「要らないなんて言っていないから。当日なにが欲しいか言うから、よしと君はそれをくれればいいの」

ああ、分かった。いや、春子が欲しい物は分からないが、恐ろしい要求をしてくることだけは分かった。絶対にプレゼントを用意しよう。

春子は何が欲しいのか、それは彼女の父である喫茶店・六連星（すばる）のマスターに聞くのが早い。そう思って喫茶店・六連星にやって来た。

今はアルバイトを辞めてしまったので、客としてカウンター席に座る。マスターは真つ直ぐ伸びた背筋で、円を描くようにゆっくりとお湯を注ぎ、コーヒー豆を蒸らしている。品のあるスーツを着こなし、これまた上品な口元の髭。いつも思うがバーテンにしか見えない。ブラックコーヒーを注文するついでに、春子が喜ぶものを聞いてみる。

「君から貰ったものなら、なんでも喜びますよ」

その答えが一番難しい。だが実際そうかもしれない。コーヒーに口をつけた。このコーヒーは絶品だ。そういえば、ブラックコーヒーの飲めない俺がどうしてこれだけは飲めるのか、その答えをまだ知らなかった。最近では知名度もそれなりに上がり、雑誌の取材を受けるほど味に定評のあるコーヒー。隠し味でも入っているのだろうか。教えてくれないだろうとは思ったが、駄目元で聞いてみた。

「ヒントは、透明な液体です」

簡単には教えてくれないわけだ。それにしても、透明な液体とはなんだらうか。ガムシロップではないだろうし。……全く分からない。「私は昔、コーヒーの仕入れをしていてね。海外に行って色々なコーヒーを飲みました。正直、どの国も日本のコーヒーより飲みやすかったですよ」

マスターは話し始めた。春子が言っていた。マスターの口数が増えるのは、亡くなった奥さんにまつわる話をする時だそうだ。

マスターは色々な国でコーヒーを飲み、その飲みやすさに魅力を感じたそうだ。しかし、どうしてもその味が再現出来なかった。

「妻はブラックコーヒーが飲めなくてね。私が淹れたコーヒーを飲んで苦いと言ったんです。そうして勝手にお湯を入れて飲んでいた。そのコーヒーをひと口飲んで見ると、そこには私の求めていた味がありませんでした」

そうか。味の秘訣はただのお湯だったのか。しかし、ただのお湯がそこまで味を引き立てるとは思えない。

「皆どうして、コーヒーを注文するのだと思いますか？　コーヒーフレッシュなんて白く着色したサラダ油です。そんなものを入れてまで注文する。なぜでしょうか」

コーヒーフレッシュってただの油だったのか。知りたくなかった。しかし言われてみれば確かに、ガムシロップやコーヒーフレッシュを入れてまで、どうしてコーヒーなのだろうか。

答えがわからない。美味しいからとしか言いようがない。

「そうです。コーヒーは美味しいんです。しかし日本は裕福ですから、ついコーヒー豆をふんだんに使ってしまう。濃いコーヒーが飲めるのは、それが好きな一握りの人間だけです」

そうか。それでお湯なのか。コーヒーの味を殺さずに、美味しさだけを際立たせる。しっかりした豆を使っている店なら、これほど効果的なことはないだろう。

なんだかすつきりした。ずっと気になっていたことが解決出来た。それにしても、お湯とはな。

世界中の人に愛されているものだからこそ、なんの特徴もない透明な味が引き立てる。悪くないな。

マスターの話に満足してしまったせいで、本題である春子へのプレゼントについて、すっかり聞き忘れてしまった。

今年の11月は気温が低い。俺は今、春子と肩を並べて歩いている。春子は俺のコートのポケットに手を入れてくる。自分のがあるのだから、そこに入れば良いのに。

今日は春子の誕生日。この日、俺たちが向かったのは、とある墓地だった。そこには春子の母が眠っている。春子の憧れだった女性で、笑顔の美しい人だったそうだ。

墓地のような開けた場所には、冷たい風が吹く。ざわつく枯葉が地面を滑る。無数の墓石が並ぶ中に、西崎と彫られたものがあった。

俺と春子はその前を掃除し、線香と花束を飾った。

「お母さん、紹介するね。この人はよしと君、私の恋人なの」

墓石の前で母に話し掛ける春子に、寂しさや悲しさは感じられない。ただただ微笑んで、語り掛けていた。

「本当は子供を作ってやろうと思っただけだね。あの日は安全日だったから出来なかったみたい」

おい、母親になに報告してるんだ。慌てる俺を見て、春子はいたずらっぽく笑っている。まったくこいつは……。

「ねえ、よしと君、キスしない？」

また冗談を言っているのかと思っただが、今回は真剣な顔をしていた。

俺は少し屈んで、春子の顔を引き寄せた。そして唇を重ねた。肌がちりちりと痛む秋風の中、唇だけが妙に温かくて心地よい。唇を離すと、春子は母の眠る墓に照れ臭そうな表情を向けた。これで春子の母親も安心するだろう。

折角だ。今まで言っていなかったことを言ってみるか。これを言ったら春子は喜ぶのだろうか。

「なあ春子……俺はお前のこと、好きだ」

自分で言っておいて恥ずかしくなってきた。一方春子は、ただ笑顔でこう言うのだった。

「うん。知ってる」

もっと喜ぶと思っていたが残念だ。

「なんだ……。知ってたのか」

俺の気持ちなんて、お見通しなんだなと思った。春子は俺の両頬に手を当てて。

「笑ったね」

まるで初めて見るような言い草だ。俺はそんなに仏頂面だったのだろうか。いや、きつとそうなのだろう。こいつはいつだって俺を見ていたのだから。

もしかしたら、常に俺の意志を尊重していたのかもしれない。別れるのを嫌がったのも、俺が春子に惹かれていることを知っていたからだろう。弁当を毎日作ってきたのも、一人暮らしの俺が市販の弁当に

飽きていたからかもしれない。

「そうそう。私はいつだって、よしと君の意を汲んで行動しているのです」

そんなことで胸を張られてもな。だが、やはり春子には敵わない。そう思った。

「だから、今度パールックして歩こう。これはよしと君も望んでることなんだよ」

それだけは嫌だ。恥ずかしい。前言撤回だ。こいつは俺のことなど考えていない。だからやめろ、抱きつくな。

そんな馬鹿みたいな掛け合いをしながら、俺たちは笑い合った。お墓なんて悲しい場所でも、こうやって静かに笑えるんだな。

結局俺の目立たない平和な暮らしは、春子によって露と消えた。あの笑ちやんの恋人として、知らない奴から声をかけられることだった。リア充にとって友達の彼氏は友達のようなのだ。煩わしい限りだ。だが彼女の隣に立った時に、釣り合わないと言われ悪目立ちする。そんなことのないよう努力しようと思えるほどには、春子のことを好きになっていった。

そうだ。誕生日プレゼントを渡さないといけない。結局何が良いのか分からなくて、指輪なんて普通な物を選んできました。サイズは分からなかったので適当だ。いずれかの指にはまるだろう。その指輪は偶然、左手の薬指にすっぽりと収まってしまった。

「嬉し〜」

シンプルなシルバーの指輪。それを指にはめ眺める。その横顔がなんとも魅力的で、ついつい見惚れてしまった。

俺は墓石にもう一度手を合わせた。どうか春子を見守ってやってくれ。あと避妊はちゃんとするように言っておいてください。お願いします。

◇ ◆ ◇

11月7日、16時25分。ひとつの命が誕生した。私はその命を生み出す瞬間、どうしてこんなことをしてしまったんだと後悔した。

痛くて、苦しくて、馬鹿みたいに叫んだ。体の弱い私は、そのまま

死ぬんじゃないかとも思った。

それは意地だった。私は昔から美人だと周りから言われていた。身長も高く、女性たちから羨望の眼差しを浴びた。でもそんなこと、どうでも良かった。感情の薄い人間だった。何を見ても心が動かず、笑ったことなんてほとんどない。だけど、たった一つだけ愛を授かっていた。それは夫への愛情。唯一、私が持っていた感情。

しかしそんな彼との時間すらも、残り少なかった。私の心臓は弱いのだ。なにもない私だからこそ、彼との子を残そうと思った。出産は体に負担が掛かる。夫は反対したが、それを押し切って出産をした。しかし実際に産んでみて感じたのは、虚しさだけだった。きつと子供が大きくなる頃には、私はこの世にはいない。夫に苦勞を押し付けるだけ。結局私には最後までなにもなかったのだ。透明な人生だった。

看護師が「可愛い赤ちゃんですよ」だなんて決まり文句を言って、子供を持ってきた。正直見たくない。妊娠してから産婦人科に通っていたので、赤ん坊は何度も見た。周りの妊婦は可愛いと言っていたが、そうは思わない。鼻は潰れているし、目だって細い。

しかし、看護師が抱えた赤ん坊を見て驚いた。可愛いのだ。それは私が親だからとかではないと思う。他の赤ん坊と比べて、明らかに違う。

その子を抱え顔を覗き込む。すると笑った。他の子が泣き喚いている中、その赤ん坊は私に微笑みかけた。

その美しい笑顔を見ただけで、救われた気がした。笑顔になれた。この子を産んで良かったなと思った。きつとこの子は特別な子なんだ。周りの人を笑顔にする特別な物を持っている。

この笑顔を守らなければならぬ。残りの人生、この子の側で笑ってしよう。きつとそれが私の幸せなのだから。

抱きかかえた娘はとても温かく春の陽気のようだった。春の子供みたいだなと思ひ、春子と名付けた。

おしまい